

第二章

一

翌早朝に、正規軍、近衛師団にかかる軍議が召集された。

王城の議場の一つに長い円卓が据えられ、正規軍総将アスタロトを始めとして、各軍正副将等が顔を揃える。

正規軍は副将タウゼン、参謀長ハイマンス、東方軍大将ミラー、西方軍大将ヴァン・ヴレック、南方軍大将ケストナー、北方軍大将ランドリー、そしてその副将と、王都に駐屯する各第一大隊の大将。

卓を挟むようにして、近衛師団総将アヴァロン、副将マーシヤル、参謀長ウエイエル、そしてレオアリス、トゥレス、セルフアン、各大隊大将と、その副将が座る。

高く取られた壁面に設けられた窓からは、朝の明るい日差しが差し込んでいたが、議場内はしんと冷え込んだままだ。

「めんどくさい挨拶は抜きだ。始めろ」

議長席に着くと、アスタロトは呼吸を置く間もなくそう告げ、片手を上げた。概略については昨晚の内に報告を受け、またその記述もそれぞれの手元に紙が置かれている。

昨晚王城の警備を担当していた、近衛師団第二大隊大将トゥレスがまず立ち上がり、改めて経緯の報告をする中、報告書を手にした列席者達が互いに顔を見合せ、厳しい表情で囁きを交わす。

トゥレスが着席すると、アスタロトはレオアリスに視線を向けた。  
「お前は出くわしたんだろ。どんなヤツだ」

レオアリスは傍らのグランズレイが僅かに身を堅くするのを、視界の隅に捉えながら立ち上がる。昨夜のレオアリスの問いに答えた時の様子。おそらくグランズレイは何かを知っている。

それが何か、これで分かるだろう。  
「夜陰に紛れての事だから確証は無い。だが、おそらく、剣士だ」

「剣士……」

改めて、議場内が潮騒のようにざわめく。

「——バインドと名乗った」

バインドの名が出た瞬間、議場内の空気が変わった。戦慄にも似た、肌が粟だつような感覚が、確かに生まれる。

ここまでの反応を予測していた訳ではない。

(何だ?)

レオアリスは自分がもたらした空気の原因を突き止めようと、広い楕円の卓に視線を巡らせた。だがそれを捉える前に、空気は何事も無かったかのように平常を取り戻していく。

それを掴みきれなかった事に、レオアリスは軽い苛立ちを覚えた。

「……あなた方の中に、この名に心当たりがあるのなら、教えていただきたい」

重苦しい沈黙がその場に落ちる。幾人かが息苦しそうに身じろぎした時、アヴァロンの低い声が流れた。

「レオアリス。今は報告だけに留めよ」

「しかし——」

だが既に、誰もレオアリスに答える気配はない。レオアリスは喉まで出かかった抗議を漸く飲み込み、椅子に身を戻した。

釈然としない、居心地の悪さが身に纏い付いている気がする。

張り詰めた空気と、沈黙。

今ここで、あのバインドの言葉をそのままぶつけたら、彼らはどんな反応を見せるのか。

「相手が剣士ともなれば、ただ困んで討ち取れるものではない。発見したとしても、各隊とも、すぐに仕掛けるのは避け」

『仇のもとに仕えるか』

晒いさえ含んだ声だった。仇？ 仇とは誰だ。

(でたらめを)

「師団に、と言うよりは、このレオアリスに任せてもらおう」  
『お前の一族はどうなった?』

一族の事など、知らない。

「信頼できるのですかな」

レオアリスは思考から引き戻され、顔を上げた。自分の考えに沈んでいたため、それが誰の発言かは分からない。

「……どういう意味です」

苦々しい空気が、その場に流れている。

「信頼、とは」

「……いや、そのバインドという輩が、事実剣士なのか、と、そういう意味でしょう。剣士かそうでないかで、対応に大きな違いがある」

そう言ったのは東方軍大将ミラーだ。他の将校達は黙ったまま、レオアリスに顔を向けている。

無表情を貼り付けたような顔。

（違う。……いや）

レオアリスは居並ぶ顔をぐるりと見回す。その奥の考えは読み取れない。

（俺が、捉われ過ぎなのか）

あの男の言葉に。

「……確証が持てないという意味で仰ったのであれば、確かに、俺の感覚で、としか申し上げられない。それこそ、信頼して頂くしかない」

信頼？

言葉が上滑りを起こしているような感覚がある。自分の立っている位置は、これほど胡乱なものだっただろうか。

今度は特に返す言葉は無く、再び議論は事後の対応へと移った。侵入者の追跡と討伐について盛んに意見が交わされ始める。

近衛師団、そしてレオアリスの昨晚の対応についても、時折針のように批判が混じる。

「今回の件は明らかな失態だ」

「王城の警護と言いながら、こうも容易く侵入を許すとは、根本的に近衛師団の体制を見直すべきかも知れませんか」

トウレスは苦虫を噛み潰したように顔をしかめ口の中で悪態をついたが、さすがにこらえて何も言わない。レオアリスもただ彼等を眺めた。昨夜の

情景が、脳裏にまざまざと甦る。

（失態か。確かにそう言われたって仕方がない）

侵入者を許した上に、捕らえる事も倒す事も出来なかったのだ。それはレオアリス自身が最も憤りを感じている。

ただ、あの時、レオアリスは斃すつもりで剣を抜いたのだ。王城内という考慮はあつたにせよ、これまであの剣を止めた者などいない。

ゆっくりと、鼓動が高鳴る。

もし。本気で剣を合わせたら……？

体内で、剣が鼓動を刻む。

近衛師団の将校が誰も反論しないまま、議論は歯車を違えたように、次第に批判は近衛師団から、レオアリス個人の責任問題へと焦点を逸らし始めた。

「最高位を謳われながら、侵入者を討つ事が出来ないとは、非常に残念だ」

「剣士の名が泣きますな。有名無実では困る」

「まあ、元々剣士など、軍にいる事自体が」

アヴァロンが鋭く卓を打った。

王の守護者の眼光に、議場がしんと静まりかえる。レオアリス自身が驚いてアヴァロンの顔を見つめた。

「今議論すべきは、侵入者に対してどう対処するか、その手法であろう。

こうした議論を、王が好まれるか」

アヴァロンの厳しい表情の前で、将校達は青ざめ、打たれたように視線を落とした。

北方軍大将ランドリーが立ち上がり、場の空気を変えるように咳払いをして卓上を見回す。

「――追跡を行うにしても、現時点で足跡を残していない状況だ。まずは徹底的に現場を洗う事から……」

俄かに、廊下が慌ただしさを帯びた。重い両開きの扉が勢い良く開く。

飛び込んで来たのは、正規軍の下級将校の一人だ。ランドリーが鋭い叱責の声を浴びせる。

「何事だ！ 騒々しい」

顔からは血の気が失せ、ひどく慌てて息を乱したまま、将校はアスタロトの前で姿勢を正した。

「も、申し上げます。たった今、北方第二軍より、急使が入りました。――街道添いの、エザムが、か、壊滅、と……」

ざわり、と議場が波立つ。エザムは北の街道上の、王都に最も近い街だ。数名が、弾かれたように席を立った。

「エザム？ あそこには二個小隊が駐屯していたはずだ！」  
声を荒げたランドリーへ、伝令兵は青ざめた顔を向けた。

「そ、それが……おそらく昨夕の事かと思われませう」  
「――馬鹿な。全滅だと……？」

ランドリーはその場に立ち尽くしたまま、呆然と呻いた。  
二個小隊、約百名もの兵が、一晩の内に？

「隊士も、住民も、家畜に至るまで切り刻まれ……街は焼き払われていると……」

二

協議はその時点で中断された。北方軍大将ランドリーがその幕下を伴い、慌ただしく議場を後にする。アスタロトもまた、王への報告の為に席を立つ。

俄かに慌ただしい空気に包まれた議場内で、レオアリスはまだ自席に腰を降ろしたまま、その動きを見送った。

「どう思う」  
傍らのアヴァロンがレオアリスに視線を向ける。

「――バインドかと。奴の左腕の剣は、炎を纏っていました」  
エザムの街を焼いたのはその炎だろう。レオアリスにはあの男が嬉々と

して街を焼き尽くす様が見えるような気がした。いや、その光景を、自分  
は見た事がある。

かつて……。  
赤い炎が記憶の片隅で揺れる。

いった？  
嬉々として剣を振るう。

木々が炎の中で振れ、家が崩れる。  
裂け目から紅い炎が傾れ込み、

誰か、が……  
「！っ」

不意に目の前が紅煉に染まった。  
「上将？」

突然椅子を蹴立てるように立ち上がったレオアリスに、グランズレイは  
咄嗟にその背に手を充てた。一瞬だけ、手によるめきかけた身体の重みが

加わる。  
虚ろに開かれていた瞳に、光が戻った。

「……上将？」  
「何だ」

グランズレイの声に含まれた懸念の響きに対して、レオアリスは事も無

さそうに問い返す。まるつきり、自分の変化に気付いていない声だ。

「……いえ」

レオアリスの背後で、グランズレイとアヴァロンの瞳がちらりと交わされる。

「ぼうっとしてるな。座れよ、レオアリス」

トゥレスが呆れたように笑ってレオアリスに席を指し示すと、漸く自分が立ち上がっている事に気付く、レオアリスは机の上に視線を落とした。

何を考えていたのだったか。

少し疲れているのか、頭が重い。

グランズレイに声をかけられる前、確か

「左……」

アヴァロンの呟きにレオアリスは視線を上げた。

「——何か、気になる事が？」

「いや。それより、今後の動きについてだが」

レオアリスはアヴァロンに正面を向けると姿勢を正す。他の大将もまたその前に立った。

「エザムの調査は北方に任せ、各隊は王城の警護を固めよ」

「バインドであった場合は、どのように」

「残念ながら今の議論が中断してしまった以上、北の管轄に手を出す訳にもいくまい」

レオアリスが悔しそうな表情を浮かべるのに気付く、アヴァロンの厳しい顔に苦笑が過ぎる。

「そう焦るな。我等としても外門を破られた責は果たさねばならぬ。公と直接話をしよう」

アヴァロンは席を立ち、大将達が一斉に敬礼する中、長布を翻して扉へと向かった。一步遅れて、二、三隊の大将達も退出する。

第二大隊大将トゥレスは扉の外でアヴァロンに並び、厳しさを浮かべているその顔を眺めた。

「俺は嫌ですよ、剣士とやり合うのは。俺は見た訳じゃありませんがね、またうちの隊を全滅させるのは遠慮したい」

「案ずる必要はない。ただ、決断を間違えれば、あの時よりも被害が甚大になる可能性は否めぬな」

「……したくない決断ならなければいいんですが」

トゥレスは一度議場内を振り返った後、左腕を胸に当てて敬礼し、踵を返した。

アヴァロンや他の大将らの退室を見送り、レオアリスは再び席に深く腰掛け、椅子の背に身体を預けた。傍らに立つグランズレイが首を傾けてその顔を見下ろす。陽はすっかり上空へ上がり、窓から差し込む光は細く議場内は翳りを漂わせている。

「上将。お疲れであれば一度屋敷に戻られては。昨夜からずっと不休で動いておいでだ」

「大丈夫だ。それにお前等だって同じだろう」

そう言ったものの、レオアリスは思い直したようにグランズレイの顔を見上げた。

「——いや。悪いが、やっぱり少し一人にさせてもらえるか」

グランズレイが覗き込んだ漆黒の瞳には、いつもと違った色はない。

「では、何か変化があればお呼びいたします」

「一隊の警備は、朝ロットバルトが作った案でいいだろう」

グランズレイは胸に左腕を充てたまま、束の間上官の表情に視線を落とすが、もう一度軽く頭を下げて議場の扉へ足を向けた。

レオアリスは背もたれに寄り掛かったまま目を閉じ、思考を巡らせる。どうしても違和感が拭えない。確実とは言えないものの、一部の者達はおそらく何かを隠している。

そしてそれを口にする事を、どこか恐れているようにも見えた。自分に対してなのか、それとも自分を含めた他の者達全体に対してなのか。

考え過ぎだと否定されればそうなのかもしれないが、

過去。

(どこか……書庫へでも行って調べる方が早いかな)

閉ざしていた瞳を上げる。その途端、離れていた所から遠慮がちにレオアリスに視線を向けていた女官と目が合った。どうやら議場の片付けの邪魔になっていたようだ。

「悪い、もう行く」

長い間考え込んでいた事に苦笑を浮かべて立ち上がり、申し訳なきその頭を下げる女官の傍を横を通り抜ける。

(何を調べればいい?)

分かってるのは、三点だ。バインドという名と、剣士である事。

そして、自分の生まれた頃と一族に、何らかの関係があるという事。

調べない方がいいんじゃないのか。

ちらりと浮かんだ警告にも似た考えを、レオアリスは敢えて打ち消した。

調べて、あの男の言葉を否定する。

侵入者が混乱させるために言った偽りに過ぎないのだと、それを確信する為にも、調べてはつきりさせなくてはいけない。

第一層、近衛師団総司令部の棟の外れから石造りの階段を地下へと下り、薄明かりの灯る短い廊下を進むと、すぐに古びた木の扉がある。近衛師団の文書保管庫だ。

師団に関わる全ての文書・記録が収められ、管理されている。

ここに足を運んだのは、軍に入ってから既に何度目か知れない。

もともとレオアリスは書物に囲まれて育つたため、すこし湿った紙独特の匂いが漂うこの場所は好きだった。軍という性質上、特定の用事が無い限りはここに立ち入る者は少ない。

誰も来ないから煩わしさもなく、好きに過去の記録や戦術書などをひっぱり出しては読み耽る事もしばしばあった。おかげで管理官とも親しくなって、基本的に持ち出し禁止の書物も度々借り出している。

だが、今日こうして書庫に足を運んでみて、改めて、レオアリスは自分が生まれた当時の記録を見た覚えが無い事に気付いた。

こんな事でもない限り考えもしない事ではあるが、各年代にあった事で大きい出来事はそれなりに記憶しているものの、順に並べかえてみると、レオアリスの生まれた年代に当てはまるものは無い。

書庫の扉を抜け、管理官のアンケスに片手を上げると、アンケスもこりと笑みを浮かべた。

「こんにちは。今日は何の書物を？」

アンケスの背後には書物が収まった書棚が、ずらりと壁のように並んでいる。アンケスに欲しい書物や見たい内容を告げれば、この書士はすぐに取り出してくる。

整理途中なのだろう、雑然と書物の積まれた受付用の机の前に立ち、レオアリスはその背後の書棚に瞳を向けた。

「十七年前の前後一、二年、記録を全部出してもらえるか」

「全部ですか？ お待ちください。でも結構な量ですよ」

「かまわない」

アンケスは軽く頷くと、書物を取りに奥に並んだ書棚に消えた。程なく戻ってきたが、数冊の綴りを手にしてしきりと首を傾げている。

「どうした？」

「いえ、……おかしいなあ。ずいぶん少ないですよ、他の年代と比べて」

「少ない？」

「ええ。例えば、前後はそれぞれ二、三冊ずつくらいあるんですが、丁度お探しのところだけ、これ一冊ですね。連番ですから間違いはないかと思えますけど」

「……へえ。ま、いいや。ちょっと借りるぜ」

レオアリスは微かに眉をひそめたが、アンケスはそれには気付かず、綴りを机の上に置きレオアリスに向かって差し出した。

「どうぞ。返却はお好きな時でいいですよ」

綴りを受け取って礼を述べ、書庫を出る。総司令部から西の区まではさほどの距離は無い。兵達や城内の様子を確かめるため、ハヤテを先に戻し、

レオアリスは通りを歩く事にした。

通りを行きかう兵達の上には慌しさと緊張感が漂ってはいるものの、ま

だそれほど逼迫した様子はない。薄い雲を輝かせ青く晴れ渡った空の下では、昨夜の事、そしてエザムの事はどこか現実感がなく感じられる。

しかし北方軍は既に臨戦態勢にあるはずで、その空気は時を置かず、第一層全体に伝わるだろう。

西の区に入ったところで、ヴィルトールの揮下の少将、ファーレイがレオアリスを認め、足早に近寄ってきた。多少緊張の面持ちではあるが、普段通りの落ち着いた顔をレオアリスに向ける。

「兵達の様子は？」

「警備を固めよという指示を既に頂いておりますので、師団は落ち着いたものです。正規が少々混乱気味ですが」

「仕方ないな。議場も似たようなものだ」

レオアリスの苦りきった声に、ファーレイはある程度議場での様子を想像できたのだろう、困ったものだと言うように苦笑を浮かべる。それから再び厳しい顔を取り戻した。

「それで、エザムが……」

口にするのを恐れる様子が、ファーレイの面に過る。レオアリスも頷いた。

「その一報で混乱したんだ。北方が調査の兵を出すと思うが、まだ状況は殆ど判ってない」

「そうですね……」

「師団がすべきは、まずは王城の警護だ。いずれ王の命があるかもしれないが、今はな」

そう言いながら、一番動きたいのは自分自身なのだと、レオアリスは胸の裡で笑った。

謎掛けなどくだらない。実際に動いてしまえば、考える余裕など無くなる。実際はそうしたくて堪らないのだ。

王の命さえ下れば。

けれど、この件に関して――。

どくりと、心音が高鳴る。

自分に、王の命は下るだろうか。

(――いや)

「では、失礼致します」

ファーレイはレオアリスの煩悶には気付かず、ただ頷いて退意を告げた。手にした綴りが、存在を訴える。それを強く握りしめ、レオアリスは離れたかけたファーレイの背に声をかけた。

「……ファーレイ、お前」

ファーレイはすぐ振り返ったが、問いかけようとして、レオアリスは結局口を閉ざした。誰にでも聞けばいいというものでもなく、第一ファーレイは十七年前はまだ近衛師団にいなかったはずだ。

「いや……。動きがないままだと兵達が動揺するだろう。すぐ状況は伝えられるだろうが、その前に流れてくるようだったら教えてくれ」

「承知致しました」

敬礼し、再び歩き出したファーレイを暫く見送り、レオアリスはひとつ頭を振って、士官棟へ向かった。

早朝に会議が始まったにも関わらず、王城から総司令部の書庫に寄って戻ってくれば、既に時刻は正午も近い。第一大隊の士官棟が通りの先に見えたところで一度立ち止まり、ふと思ひ直して、士官棟の手前で道を逸れた。

執務室でこの綴りを開く事は、何とは無く憚られた。

士官棟の背面の壁を右手に見ながら棟の裏手に出ると、そこには小さな裏庭がある。棟の反対側は高台のように張り出した造りになっており、そこから王都の街並みが見渡せた。王都の構造そのものが、王城を中心に緩やかな階層を重ねている為に、こうした高台は多くあった。

空に向かって開けたそこからは、王都から各方面へと延び、一旦深い森の中に消えていく街道が、白い帯のように映る。

この西側からは見えないが、北の街道が森を抜ければ、エザムの街がある。馬であれば一日足らずで着く距離でしかない。今、北方軍が調査を向けているはずだ。

バインドと遭遇すれば激しい戦闘になるだろうが、既にエザムにはバインドはいないだろうと、レオアリスは思っている。

尤も、まだエザムについてバインドだと決まった訳ではない。今は調査の結果を待つしかなかった。

街並みから視線を外し、草を踏んで裏庭を歩き中央の噴水の辺りで足を止めた。噴水はずいぶん前に枯れ、存在も忘れられたような庭で、ここに来るのはほとんどレオアリスしかいない。少し息抜きをしたい時に、よくここに来ていた。我ながらそういう場所を見つるのが上手い、と思わず苦笑を零す。

噴水の脇に座り、ひび割れて崩れかけた縁石に寄り掛かると、手にしていた綴りを眺めた。

暫らくそうしていたが、やがて息を吐き、表紙に手を掛けて、ゆっくり、項を捲る。

心音がやけに煩い。こめかみの辺りを、血液がどくどくと巡っていくのが鮮明に判る。

注意深く、前年、目的の年、翌年と全て目を通したが、通常の任務と演習の記述があるだけで、特にこれといった記述は無かった。

レオアリスは暫く息を止めるように飲み込み、綴りを見つめた。

「――」

もう一度全ての記述に目を通したが、やはり何も変わったところを見つけれなかった。手の中で綴りを幾度もひっくり返して弄びながら、レオアリスは自分の行為を笑った。

気にし過ぎて、滑稽だ。

(何もないじゃないか。何があると思ってるんだ?)

目的の年だけ少ないのが気になるが、一冊だけという年がこの年以外に全く無い訳ではないだろう。

あの男――バインドが言った事が正しいとも限らない。むしろ、適当な偽りを言っていると考える方が、正しい考え方かもしれない。

『お前の生まれた頃だ。』

(気にしすぎだ)

「何もない」

今度は声に出して呟いてみる。だが、それは自分の耳へすら、どこか力無く届いた。

グランズレイの態度。議場に一瞬だけ満ちた、戦慄にも似た空気……。否定をしようとすればするほど、与えられる反応が疑問を投げかける。

「何もなかったじゃないか」

もう一度、切り捨てるように呟いて、綴りを脇に置き両手を頭の後ろに組むと、レオアリスは瞳を閉じた。

瞼の裏に、昨夜の光景が甦る。

焔を纏った、紅い剣。

レオアリスと同じ剣士。自分以外の剣士を、始めて目にした。

剣を止められた感触を、つい先程の事のように思い出す事が出来る。

驚き。

男の言葉への疑念。

それから、確かに湧き上がった、もう一つの感情――。

あれは。

閉じた瞳の奥に、ちらりと紅い陰が揺れる。

体内で、もう一つの鼓動が小さく脈を打った。

震えるようなその鼓動が、断続的に響く。

それは剣の声だ。よく、知っている。

顕現する事への歓喜を、剣を振るう瞬間に伝わる感情を、こうしている

今も思い出す事が出来る。

更に覗き込めば、剣もまた手を伸ばす。

――自分の、深淵を。

ふいに身体を引きずり込まれるような、一瞬の剥落感を覚え、レオアリスは跳ね起きた。

荒い息をつき、自分の鳩尾に視線を落とす。

何も変わった事はない。剣は静かにレオアリスの中に眠っている。

「――」

「上将。やはりこちらですか」

呼吸を整えようと息を吐いた時、水気の無い草を踏む音と聞き慣れた声  
が掛かった。瞳を上げると、沈み始めた太陽を背にロットバルトが歩いて  
くるところだった。

金髪が陽光を弾くせいで表情はあまり見えない。だが、レオアリスの脇  
に置かれた綴りを見て、僅かに眉を潜めたようだった。

「副将がお呼びです。エザムについて緊急の軍議が招集されました。議場  
へお越しいただきたいと」

ロットバルトの髪が薄く赤い夕光を纏っている事に、いつの間にかそれ程  
時間が経っていたのかと驚きを覚える。眠っていただろうか。

「ああ、悪い。――動きは」

「特にはありませんね。まあ、昨日の今日で王城の警備は膨れ上がって  
います。この状態で尚、城内に忍び込もうという輩もいないでしょう」

「まあな」

服に付いた草を払って立ち上がり、綴りを取り上げる。士官棟に足を向  
けたレオアリスの背に、ロットバルトが声をかけた。

「上将」

呼び止める声にレオアリスが振り返る。その顔に、落ちてゆく西日がき  
つく差した。

振り返ったその先に、落日が城下の町並みを、緋く深い光の中に沈めて  
いる。

レオアリスは振り返ったまま、動きを止めた。

瞳が、落日に光を吸い取られたかのように色を消し、手にしていた綴り  
が足元の草の上に落ちる。

「上将……？」

訝しそくに歩み寄ったロットバルトの前で、レオアリスの身体が揺らぐ。  
ヒヤリとした感覚が、ロットバルトの背筋を過った。それが何か捉えき  
れないまま、咄嗟に腕を延ばす。

倒れこむ肩を支え、その顔を覗き込み、ロットバルトは感じた寒気の理  
由に気付いた。

同じなのだ。暴走を起こしたあの時と――。

だが、今、何がそれを呼び起こしたのか。

あの時はおそらく、切り裂かれたミストラ族の姿に触発されたのだ。  
まだ動かないレオアリスの身体を支えたまま、ロットバルトは背後を振  
り返ったが、特にこれといったものは見当たらない。

ただ夕照に沈む王都が映るだけだ。

レオアリスの身体が、大きく鼓動を刻む。

草の上に落とされた瞳は、何か別のものを見ている。

呼吸が乱れていくのを感じ、ロットバルトは素早く頬を打った。  
乾いた音と同時に、レオアリスの視点が定まる。

「……痛い」

少し強く打ち過ぎたようだ。レオアリスは赤くなった頬を手の甲で擦り、  
訳が判らないといった顔で目の前のロットバルトを眺めた。

「――失礼。ぼうつとしておられたようなので」

「ぼうつと？ 俺が？」  
まったく心当たりがないのか、レオアリスは自分の行動を思い起こそう  
と瞳を眇めた。

「いえ、気のせいでしょう。失礼しました。それより、急がないと軍議に  
遅れます。また余計な皮肉は聞きたくはないでしょう」

ロットバルトはそれを押し止めるように告げ、レオアリスを促す。

今、思い出させるべきではない。それがレオアリスにどのような影響を  
与えるのか分からないが、ここは王都だ。

「ハヤテは？ 戻ってるか？」

「戻っていますよ。一人で帰されて、少々不機嫌なようですがね」  
ロットバルトの言葉にレオアリスは笑って、出口へと足を向けた。

「不機嫌なのは、最近遠乗りに行かせて貰ってねえからだ」

「そうですか？ 前に副将から咎められてから、まだ半月ほどしか経って  
いないと記憶しておりますが」

「ひと月は経ってるだろ」

レオアリスは眉をしかめ、ロットバルトの澄ました横顔を見上げた。ロッ

トバルトは昨夜のバインドの告げた言葉を聞いているが、いつも通り、変わらない表情でしかない。

「――」

レオアリスが探しているものを伝えれば、この参謀官の方が上手く探し出すだろう。

一度問われたように、伝えた方がいいのかもしれない。

少しだけ迷い――、結局レオアリスは何も告げないまま視線を戻した。

(まだ、もう少し、事の全体が掴めてからだ)

口にするのが怖いのかと問われれば、レオアリスはそれを否定するだろう。

けれど確実に、それはレオアリスの中にあつた。

王城へ向うレオアリスの後ろ姿を見送り、ロットバルトは再び先程の方向を振り返った。既に陽は落ちきり、薄赤い夕闇が辺りを覆っている。

(――何だ)

先程のレオアリスの様子は、ミストラの時と同じようで少し違う。あの時は押さえられていたものが、一つを切っ掛けに一気に弾けたような状況だったが、今回は。

ロットバルトは当てはまる言葉を探した。そう……。

曖昧なのだ。明確な原因が見えない。

確実に言えるのは、レオアリスの変調に、バインドが関係しているという事だけだ。

レオアリスが話を向ける気になるまで待つつもりでいたが、今の様子を考えれば、それでは対応が後手に回りかねない。十七年前に何があつたのか、把握しておく必要がある。

レオアリスは師団文書庫を調べていたようだが、先ほどの様子ではおそらく何も得るものは無かつたのだろう。

(文書での記録は無いと考えた方がいいかもしれない。とすると、人か……)

少なくとも十七年前から情報を得る地位にあり、剣士についても一定の

知識がある人物。

思い当たる相手はいる。幾人かは面会も得られるだろう。

手持ちの札は少ないが、多く見せるのはそれほど困難ではない。

ただ、事実が何か、そこが全く見えていない以上、札の引きを間違えれば、レオアリスの立場を悪くもしかねなかつた。

(剣士。剣士か……)

これまで漠然とした疑問しか持っていなかつたが、思った以上に、剣士という種に関する情報は少ない。

ロットバルトはもう一度、完全に陽の落ち切つた西の空へ視線を投げ、執務室に足向け歩きだした。

夜の闇の中で一人目を閉じる。そうしていると遠い場所から聞こえるざわめきと、横たわった寝台の柔らかい生地感覚しか感じられない。

冬が近づきつつある王都では、夜は次第に冷え込みを強くし始めていた。北方の辺境のあの村では、もうそろそろ雪が降り始める頃だ。一旦雪に覆われれば、王都が春を迎えてもなお、一面の白い世界に閉ざされている。

脳裏に思い描いた祖父の顔は、ひどく懐かしさを伴った。今もあの囲炉裏の傍で、薬草や術具、大量の本に囲まれているのだろう。王都に出てきてから数えるほどしか帰っていないが、常に彼等を忘れた事は無かった。

自分を育ててくれた養い親達。

レオアリスが王都での王の御前試合に出ると言った時、彼らは強く反対した。ただそれは、自分の未熟さを思慮したものだとはかり思っていた。

けれど、もしあの男、バインドの言葉に真実があるのなら、彼らは何かを知っていたのではないか？

『お前の一族はどうなった？』

(――俺の、一族)

瞳を開ける。薄闇の中に、格子状に細い木の張られた天井が映る。

一族などと言われても、それはレオアリスの中に明確な像を結ばなかった。

親の顔など知らない。気にならなかったと言えば嘘になるが、あの北の雪深い村で育ってきた中で、それを想う事はほとんど無かっただろう。

というよりは、ある一時期まで確実に、全ての子供には『親』という存在があるのだという事すら知らなかった。村には自分の他に子供はおらず、年を経た老人達ばかりだったからだ。

自分と祖父達の姿が違うのは知っていたが、村の外を知るまでは、ある意味それはレオアリスにとって当たり前の事だった。

いつだったか、初めて近隣の村へ出た時、自分と同じような姿の者や、小さい子供の手を引く者の姿を、どこか不思議な思いで眺めた事を覚えている。

それが親子というものだとして自分に告げた祖父の顔には、どこか翳った色があった。その後考え込むように黙ってしまった祖父の悲しそうな姿に、聞くべき事ではないのだと、以来その事を口にした事はない。

だが、あの時自分はどう思っただろう？

あまり気に留めなかった気がする。それとも、少し、寂しさを感じたのだろうか。

ただそれ以来、あの廃墟、ずっと昔に焼け落ちた森の中の家々が、自分の『親』が居たところなのではないかと、時折思った。

一族。

レオアリスは再び瞳を閉じた。

手が無意識の内に、首からかけた小さな青い石の飾りを握り込む。そうすると、波打つ思考が静かに、穏やかになる。

何があるというのだろう。隠すべきもの。

静かなざわめきが、次第に意識を眠りへと引き込んでいく。

夢の中で、燃え盛る赤い炎を見た。

深い闇の中、長靴の固い足音が大理石の廊下に響く。

アヴァロンは謁見の間の扉を通り過ぎ、その先にある階段を昇ると、幾つもの扉を抜けて一つの部屋の前で足を止めた。既にそこは王城内の公的な層を抜けた、王の居城の区域内だ。

扉の前でおとないを告げると、王本人の低い声が応えた。

扉を開け左胸に腕を当てて一札を捧げる。アヴァロンは王の前へと歩を進め、その場に片膝を付いた。王の傍らに立っていたベールがアヴァロンに場を譲るために一歩退くのを、静かに頭を下げる。

深夜にも関わらず、王はまるで休息していた気配も見せず、黒檀の執務机の前に腰かけたままアヴァロンにその黄金の視線を向けた。

王の居城の一角、執務の為に使われているこの部屋には、四大公や筆頭侯爵家、相談役、そして師団総将の、限られた者しか立ち入る事を許されていない。通常の謁見及び執務は、階下の謁見の間で行われる。

壁一面の書棚と執務の机のみが置かれた簡素な造りだが、王城内と同じ黒と銀を基調にした室内には、重厚な空気が漂っていた。それは目の前の存在が纏う空気だ。

アヴァロンの口からバインドの一件を聞いても、王はその表情を動かす事は無かった。昼にアスタロトから報告を受けている事もあるのだろうか、王の上には少しの焦燥も懸念もない。

エザム調査の指示を出しているが、通常の指示の範囲を出てはおらず、アスタロトやアヴァロンに委ねられた形になっている。

本来、王には国など必ずしも必要ではないのだと、アヴァロンは時折そんな事を思う事がある。

王を守護する要の役割にありながら不敬な考えかもしれないが、王を守護すると言ったところで王の前に自分達の力など微々たるものだ。

王が支配を必要としているのではなく、自分達、この地が王の支配を必要としているのだ。王の支配と規律が無ければ、この国は他国と同様に、混沌と戦乱が満ちるだろう。

こうしてアヴァロンの報告に耳を傾ける時の王の姿を眼にすると、アヴァロンはより強くその事を思った。

十七年前、バインドの件を伏せさせた事についても、内部の混乱を抑える為でしかない。王自身がどれほどの危惧を感じているのか、アヴァロンには感じ取る事は出来ない。

ただあの時は、王の関与は少なからずあった。十七年という年月は、王の意識を摩耗させるほど長いとは思わない。

王は今回の事を、どう捉えているのか。今回、あの時より問題はひとつ多いのだ。

「……バインドとの接触により、レオアリスは既に疑問を持ち始めております。全てが明らかになるのは、時間の問題かと」

例えバインドの名を伏せ、あの戦場を伏せたとしても、多くの者の記憶にそれらはこびり付いて消える事はない。バインドが動き続ける限り、やがてはレオアリスは答えに行き着くだろう。

それは再び、あの戦場を蘇らせる危険すら併せ持っていた。

判断を待つアヴァロンの前で、王は僅かに口元に笑みを刷いた。

「そなたは、あれが過去を知って変わると思うか」

王の言葉に、アヴァロンは暫くの間、黙ってその顔を見つめた。

変わるか、変わらないか――。

レオアリスの王に対する忠誠心は疑うべくも無い。今の段階では変節があるとは考え難い程、それは強固に思える。

だがそれはあくまでアヴァロンの主観に過ぎず、説明できる根拠がある訳ではない。

アヴァロンの思考を読んだように、王は再び薄く笑みを浮かべた。

「敢えて知らせる必要はない」

「しかし、」

「だが、バインドが現れた以上、事態は再び動き出した。もはやレオアリスが知る事を止める必要もないだろう。真実はあれ自身が自ら知り、判断すべき事だ。あれとバインド以外、誰一人当事者では有り得ないのだから」

アヴァロンは傍らのベールに意見を求めるように、ちらりとその視線を向けたが、ベールはただアヴァロンに視線を返すだけで特に口を挟もうとはしなかった。諦めて王に視線を戻す。

王は、レオアリスが変節する事は無いと確信しているのだろうか。

それとも、変わったとしても、それはそれで構わないと、そう考えているのだろうか。

アヴァロンの顔に浮かんだ疑問に答えるかのように、王は黄金の瞳を細めた。

「私は、少し、見てみたいのだ」

何を、と問おうとして、王がもはやそれに関して語る気の無い事を、その瞳から悟る。

黄金の瞳が向けられる先に見えているだろうかものは、アヴァロンには想像する術はない。心の中に持ち上がる僅かな懸念を飲み込み、アヴァロンは深く頭を下げた。

## 五

エザムの壊滅。

軍議は対応を巡って紛糾した。当初の報告にあったとおり、北方軍が駆けつけた時点で既に、エザムには動くものすらなかった。街並みは見る影もなく破壊し尽くされ、燻った煙を上げていた。

調査の結果、エザムを壊滅させたのが、たった一名によるものであろうという結論に達し、軍内部に衝撃が走った。

壊滅から三日が経った今も、明確な対応を打ち出せないまま、既に数回の討議を重ねている。

バインドの情報が少なすぎる事、またバインドと対峙した時、どれ程の兵を充てれば討ち取る事が出来るのか。それらを巡って議論は平行線を辿った。

「二個小隊が壊滅させられたのだ、動くのであれば、中隊を基本にすべきだ」

「それでは本来の軍の編成が意味を成さなくなる。第一、警戒し過ぎではないか？」

「軍を各方面に差し向けて、草の根を分けてでも捜し出すべきです。王城への侵入、エザムの壊滅、これで手をこまねいていれば、軍の威信に関わる」

「たった一匹の賊の為に軍を動かせば、それこそ威信に傷が付くと言うものだ」

「もはやその様な事を言っている場合ではない！」

レオアリスはその様に、心に広がる苛立ちを隠しきれない。

バインドに関する情報を知っている者は、全て出せばいいのだ。現在の事のみならず、過去のものも全て。そうしなければまともな対応など出来はずまい。そうなる事を、レオアリスは期待すらしていた。

だが事ここに至っても、知っているであろう者はそれをしようとはしない。むしろ軍議において積極的に発言する事を避け、事の行く先を見定めようとしているようだった。

彼等自身に直接尋ねようにも、互いに多忙の中ではその機会も無い。また、運よく話す事が出来た者も、何の事かと問い返されれば、それ以上面白い質がなかった。

手探りで不確かな情報を拾い集めようとする今の状況は、レオアリスの中に少しづつ焦燥を積み上げていく。

「そもそも、責任の所在を」

閣議の間で延々と交わされる議論に、正規軍の長であるアスタロトは欠伸を噛み殺す事もしない。ちらりと細長い円卓の対角に座っているレオアリスに目を向けた。

(苛立ってんなあ)

バインドが現れて以降、軍議では連日のようにレオアリスに対する批判の声が上がっていた。バインドと対峙しながら逃した事に対する批判だが、その根底には日頃からの様々な思惑がある。

「もちろん、この責任は果たされるのでしょうか」

既にそれは何度も繰り返された言葉だが、議場内を覆う焦りや屈辱感は、より単純な議論しやすいものへ収斂されていく。アスタロトは小さく溜息を吐いた。

「王城を守護すべき近衛の大將が侵入者を逃すなど、本来任を解かれても致し方ないものだ」

「この先、もしいずれかの街が襲撃されたとしたら、どうその責任を取るつもりか」

堪り兼ねたトゥレスが、苛々と正規軍の将校達を睨めつける。

「そう言うなら、早いところバインドの情報を取ってきて貰えないか」

バインドがエザム以来動いていない事、またエザムに関する件については全て正規軍に権限があるため、近衛師団が勝手に動く事は出来ない。未だ管轄に拘っているのは正規軍の方だ。

喉元まででかかった不満を飲み込んだトゥレスに対し、北方軍大將ランドリーはやはり苛立ちを隠さず、トゥレスと、そしてレオアリスを睨んだ。

「勿論、正規は昼夜を問わず搜索している。だが、剣士殿は動く気配もないではないか」

「どこにいるかも判らずに、動ける訳がない」

「まさか同じ剣士とあって、臆したのではないでしょうな」

ランドリーの言葉に、正規軍の将達の間から微かな失笑が洩れた。色をなして立ち上がるうとしたグランズレイの腕を、レオアリスが押さえる。

「……臆する……？ 俺が？」

それまでの苛立ちも相まって、レオアリスは取り繕う事すらせずに、彼らを見据えた。その口元に浮かんだ凄惨とも云うべき笑みに、それまで不満を口にしていた諸侯が押し黙る。

レオアリスが——剣士が戦いを臆する事は無いと、その場の誰もが理解している。しかしその頬に浮かんだ笑みは、彼等を少なからず戦慄させた。

戦いを、同じ剣士と剣を交える事を、待ち望むかのような笑み。

それは——。

(ま、今回のこれを片付ければ、こいつ等はどうせ何も言えなくなる)

その場を満了した緊張を事も無く見渡して、アスタロトはもう一つ欠伸をする。

(——剣士か)

アスタロトにとっては軍議は退屈で、エザムの壊滅も今更言っても仕方のない事だと思っていたが、レオアリスの剣を止めたその男には、僅かに興味を覚えた。

ここに居並ぶ諸侯の中で、おそらく剣士を抑え得る者など僅かだろう。正規四軍の大將か師団総将であっても、エザムをたった一人で壊滅させる事など、不可能に等しい。

アスタロトが考える限りでは、最もそれを可能とするのが、同じ剣士であるレオアリスだ。

軍を出すの出来ないのと、ここで議論をする事自体が無駄なのだ。

アスタロトは短く息を吐き、顔を上げた。

「さて、今日はこれまで。解散だ」

「し、しかしアスタロト公」

「しかし何かかしもあるか」

「か、かかし？」

「お前等連日顔を突き合わせて、一体どんな議論が進んだ？ぐるぐるぐるぐる同じところを回りやがって、尻尾を追い掛ける犬じゃあるまいし。時間の無駄だ。どうしても議論を続けたいなら次回までに具体案を出せ。ほれ解散」

アスタロトがさっさと席を立つと、正規軍副将タウゼンが軍議の終わりを告げる。

しぶしぶといった呈で席を立つ者、解放された色を浮かべる者、様々だ。

レオアリスも溜息を一つ吐いて立ち上がった。アヴァロンが彼を手招き、二、三言、今後の体制について言葉を交わすと、先に退出する。

諸侯が退出して行くのを眺めながら、アスタロトはレオアリスに歩み寄り、その前に立った。傍らのグランスレイが深く頭を下げるのに対し、軽く手を振って答える。

「お疲れ。大変だなーお前も。めんどくさい奴らばっかでき。ま、後ろのグランスレイの方が噛み付きそうな顔してたが」

アスタロトにすっかり見られていた事に、グランスレイは恥じ入ったように口元を歪めた。

「これは、みつともない姿をお目に入れました」

「気にすんな。あいつらもう、やれる事なくって焦ってた。正規がこれってのは情けないけど、一旦動き出したらさっちりやるからさ、まあ勘弁してやれ」

控えめな笑みを浮かべ、グランスレイは再び頭を下げた。

「しかし、相手が動かない事には、我々としても手の施しようがありません。公、ほんの僅かでも情報が入れば、何卒我が隊にもお知らせ戴きますよう」

「分かってる。結局レオアリスには動いてもらわなきゃなんないしな」

「上将、私は先に戻ります。午後は演習がごさいますので」

「ああ」

左腕を胸に当て二人に敬礼すると、グランスレイは後方の扉に向かった。グランスレイの後姿を、レオアリスはどこか複雑な色を浮かべて眺めている。アスタロトはその横顔をチラリと見て、白っぽい陽射しの差し込む

がらんとした議場内を見渡した。ここ数日で、すっかり見飽きた眺めだ。レオアリスは何かを気にしている。それが何かは分からないが、レオアリスが言わないのであったら、敢えて水を向ける気も無い。自分の助けが欲しくなったら、そう言って来るだろう。

レオアリスは暫らく同じように黙って議場内を眺めていたが、改めてアスタロトに顔を向けた。

「悪いな、アスタロト。お陰で早めに開放された」

首を傾げ少し考えてから、軍議の事を言っているのだと気付いて、アスタロトはもつと礼を言えといわんばかりの笑みを浮かべた。

「ふふん、感謝しろ。ま、私も鬱陶しかっただけだ。時間の無駄なんだから」

「無駄……。そりやそうだが、お前がそれでいいのか」

レオアリスに呆れた視線を向けられても、アスタロトはあっけらかんとした態度で顎を持ち上げた。

「いいの。とにかくお前さ、さっさとバインドとやらを斬っちまえ」

その言葉に、レオアリスは笑みを刷いた。楽しそうに声を立てて笑うと、アスタロトは再びその鮮やかな深紅の瞳をレオアリスに向ける。

「ま、あんまり考えすぎんなよ。たまには息抜きしなきゃ。遊びに行くなら付き合うぞ」

「本当、お前はそればかりだな。——分かってる。まあ、適当にやるさ。相手が目の前にいない以上、どうしようもないからな」

だがそう言って笑いながらも、黒い瞳には沈んだ色が見える。アスタロトは思わし気な色を浮かべたが、それには気付かず、レオアリスは窓の外に視線を投げた。

この二日、当たった先は空振りばかりだ。誰に問うべきなのかも明確ではなく、誰にでも問えばいいという問題でもない。

自分で探って行く他に手は無いが既に手詰まりの感がある。師団の保管庫にはあれ以上の情報はなかった。

(もう一つ、調べてみる所がある)

王立文書宮。そこなら、全ての書物が揃っている。今の段階で、情報を

得られる可能性が最も高いのは、王立文書宮だろう。蔵書量もさる事ながら、王立文書宮の管理官は膨大な知識を有している。時間を見つけて、明日にでも行ってみる必要がある。

六

「雰囲気悪いね。何かピリピリしてやがる」

昼食時で混み合った食堂内を見回し、クライフは顔をしかめた。この三日というもの、兵達の中にも重苦しい空気が漂っている。それは見えないものへの不安であり、見えるものへと転じていく不満だ。

クライフの前で、フレイザーは手にした陶器の茶器を口許に寄せる。ふわりとした湯気と花の香りに翡翠の瞳を僅かに細めた。

「上層部の様子は表には出てこなくても、何となくは伝わるものよ。外門とエザム、二つの状況だけしか判っていないし、その後のバインドの情報が無い中では、何をどうすればいいのか不安にもなるわね」

二人が今いる食堂の中にもそれがはつきりと見て取れる。これまでは近衛師団、正規軍双方の兵がさほどの問題もなく混在していたことで、今はくつきりと両者の間に線引きがあった。それぞれが食堂内の左右に分かれて固まり、目が合えば互いに睨むか視線を逸らすようになっていた。

「ちえ、せっかくフレイザーとの食事だったのに、こんなじゃ雰囲気出ねえよなあ」

「あら、何の勘違い？」

クライフが情け無さそうに顔を歪めた時、奥の席が俄かに騒がしくなった。怒鳴り声と床の上に食器が散らばる派手な音が響く。クライフは眉をしかめたまま立ち上がった。

「つたく、馬鹿が」

口の中で吹き、ずかずかと大股で騒ぎの方へと足を進める。

「そもそも、お前等が外門を守れなかったのが問題だろう！」

正規兵の一人が目の前の師団兵を睨み付けると、隣で立ち上がった正規兵も声を上げる。

「そうだ！ 王城の守護が聞いて呆れるぜ！」

正規兵達から囁すように同意の声がかかり、今度は師団の他の兵達が立ち上がった。

「エザムの二個小隊を壊滅させといてよく言うな。力不足は正規の方じゃ

ねえのか！」

同意と野次が双方から飛び交い、瞬く間にそこにいた兵達が集まり、騒々しさが一段と増していく。

「大体お前等の大将は何やってんだ？ さっさと出て奴を討てばいいのによオ」

「そうだ、どうせ同じ剣士でなきや何もできないんだ」

「実際、怖くて出らんねえんじやねえのか？」

「ふざけるな！」

「おい、聞き捨てならんぞ！」

師団兵達が一斉に色めき立つ。

「びびってんなあ正規の方だろう！ 搜索に手エ抜いてんじやないのか！？」

「何だとオツ」

まさに掴み合いになりかけた瞬間、左右から同時に叱責の声が飛んだ。

「いい加減にしろ、テメエ等！」

「ガキみてえに浮っ付くんじやねえ！」

雷に討たれたようにさつと静まり返り、兵達はそれぞれ自分達の後方で仁王立ちになったクライフとワッツの敵しい表情を見つめた。

ワッツは集まっていた兵達の間で巨体を押し込むようにして中央まで行くくと、ぐるりと居並ぶ顔を見渡す。細い眼の中の鋭い眼光を浴びせられ、

兵達は熱が冷めたように顔を伏せた。

「一体何やってんだ？ お前等は。この狭え中でお互いに非難し合ってるのが正規と師団の実体か。王城の守護は師団の役割だが、正規軍一隊が王都に駐屯しているのが何の為か、それを忘れてる訳じやないだろうな？ そんなんで王都が守れるか」

一つ一つの顔を覗き込むように視線を向けるワッツに対し、兵達は言葉もなく畏まる。呆れ顔で眉を一つ上げ、ワッツは兵達の向こうのクライフを振り返った。

「クライフ、テメエもビシツと言ってやれ」

「……てめえが全部言っちゃったよ」

息を吐き、首筋を掻くクライフの隣でフレイザーが微笑みを浮かべた。「ワッツがいてくれて良かったわね。貴方殴って止めるつもりだったでしょう」

「んな事は……」

ワッツがにやりと笑う。

「クライフが先に仲裁に入ってたなら、俺も参戦してたぜ。その方が意外と発散できたんじゃないか、なあ？」

ワッツに同意を求められ、兵達は慌てて首を振った。

「と、とんでもございませぬ！」

「遠慮すんなよ。溜まってんだろオ」

目の前にいた不幸な正規兵の肩を力一杯揺すり、ワッツは豪快な笑い声を上げた。

「はいはい、そこまでにして頂戴。言うことは他にあるでしょう」

パンパンパン、と両手を打って兵達を振り向かせ、フレイザーは改めて彼等の顔を見渡した。

「苛立つ気持ちは良く判るわ。でも、上層部からの指示が無い限り、言ってしまえばあなた方に責任は発生しないの。気楽に構えるのね」

フレイザーの柔らかない笑みと口調に緊張をほぐされたのか、兵達の顔から強ばりが取れる。一番端にいた兵が顔を上げ、おずおずと口を開いた。

「しかし、何も指示が無いのでは……」

「不安かしら」

「エザムを壊滅させる程の相手です。奴がまた来たら、俺達に対抗できるんでしょか」

「おいおい、そんな事でどうする」

「しかし……：相手は剣士では」

再び不安そうに顔を見合せた兵達の前で、フレイザーはにっこりと笑って腰に手を当てた。

「あら、忘れたの？ 王都には上將がいらっしやるわ。貴方達、バインドがどんな相手か判らなくても、師団第一大隊大将は知ってるでしょう。王の御前試合を見ているんだから」

その言葉で完全に不安が晴れた訳ではないだろう。しかし兵達の顔からは、先程までの怯えにも近い色が半分薄れている。フレイザーはもう一度、安心させるように彼等を見回した。

「そう遠からず結果は出るわ。それは私が予想する通りになるでしょうね」  
フレイザーもまた、バインドという剣士がどれほどの相手なのか知っている訳ではない。だが彼女の瞳にはレオアリスに対する強固な信頼があり、それは兵達へ静かに広まっていくようだった。

「さあさあ、ぼうつとしてんなよ。午後の訓練があるだろう。とつとと飯を食っちまえ」

ワッツが彼等の背を追い立てるようにして元いた席に戻す。再び大人しくなった食堂内を眺め、クライフとフレイザーも卓に戻った。

「すげえ。惚れなおした」

「あらそお？ それより、困った状況よね」

「それより……」

項垂れかけたものの、フレイザーの瞳に覗いた深刻な色に、クライフも表情を引き締め直す。

「いつまで軍議ばかり続けるのかしらね。一言討伐を決めれば、後は動くだけなのに。結局、上將しか剣士を抑えられないんだから」

「でも正規の管轄になっちまってんだろ？」

「まだそれすら決まってないのよ。だけど正規の管轄になって、誰が剣士と闘うの？」

そう問われて、クライフは恐る恐る口を開いた。

「……アスタロト様とか？」

「馬鹿言つて。あの方を動かすのなんて、大戦並みよ」

「剣士だってそうだよ。前の大戦じゃ、剣士の力がでかかったんだから。何て言ったつけ、大戦の剣士。……まさかそいつじゃねえよなあ」

「違うわよ。ジンでしょ。今はどうしてるのか知らないけど」

最早三百年も前の話だ。フレイザーにしても歴史の一端として知っているに過ぎない。その当時から軍にいたのはアヴァロンぐらいだろう。

「上は結局ぶるってんだろ。だからさ」

フレイザーはクライフの物言いに咎める視線を向けたが、そのまま視線を落とした。

「——そうね……」

ふと黙り込むと、まだぎこちないながらも兵達の交わす声がざわざわと聞こえてくる。フレイザーは冷めた紅茶を一度掻き回し、ただ匙を置いた。

「……あの人、また迷ってるのかしら」

咳きを耳に止め、クライフが顔を上げる。

「あの人？ 誰？」

「えっ？ あつ、やだわ、何か言った？」

途端にフレイザーは顔を真っ赤に染め、クライフの眼から逃げるように右手を上げて遮った。

「何かって、……」

「とにかく、もう迷ってる時じゃないのは確かよ。どうか……決断してもらいたいものね」

そう言い置いて、フレイザーは席を立ち、まだ微かに赤い頬に手を当てるようにして、足早に食堂の出口へ向かった。

「ちよつと、フレイザー……。——誰の事だよ……くっそお」

拳を握り締めたものの、向ける先も無い。クライフも一度自分の頬を軽くはたいて席を立った。

クライフが士官棟へ戻ると、先に食堂を出たフレイザーとヴィルトールがいるのみで、他はまだ戻っていないようだった。

「上將は？」

席に着いて椅子の背に身体を預け、ヴィルトールに顔を巡らせる。何かの書面を読んでいたヴィルトールは、それを伏せて顔を上げた。

「お二人ともまだだよ。けどもう戻るだろう」

「長えなあ。決まったのかな」

「さて……」

丁度そう言っている間に、扉が開き、グランスレイが入ってくる。

「お疲れ様です。上將は？」

「公と少し話をされている。程なくお戻りになるだろう」

「それで……」

「まだだ」

眉をしかめ短く告げただけで、グランズレイは自席に向かった。ヴィルトールが立ち上がり、グランズレイの傍に寄ると、先程まで見ていた紙を渡して一言二言何事か告げる。グランズレイは再び眉をしかめたが頷いた。ヴィルトールが紙を畳んで懐にしまった時、再び扉が開いた。彼等は同時に顔を向けたが、入って来たのはロットバルトだ。彼等は同時に顔を向けたが、入って来たのはロットバルトだ。余りに一斉に視線を向けられた為、ロットバルトが思わず足を止める。

「何だ、お前か」

身を起こしかけたクライフは、また元のように椅子の背に寄りかかった。

「何だと言われても……上將はまだお戻りではないんですか」

「まだだし、まだ決まっていってよ」

ロットバルトは何も言わず、ただ呆れたように肩を竦めて机へ向かう。何とはなしに会話は途切れ、クライフは暫く窓の外を眺めていたが、それをグランズレイへと戻した。

つい先程の食堂での諍いが思いだされ、軍議が決着しなかったと聞いただけで、はいそうですかと黙ってはいられない。

「……副將、いつまで放っておくつもりなんです」

「何の話だ」

クライフは立ち上がり、グランズレイの机に近寄った。

「決まってるでしょ、上將に対する批判とか、言わせっ放しでいいのかって事です。軍議じゃまともに対策も練らないでそればっかって話じゃないですか」

クライフほど表情には出していないものの、フレイザーやヴィルトールの顔の上にも同様の思いがあるのを見て取り、グランズレイは苦々しい溜息と共に頷いた。

「そればかりが上がっている訳ではないが、連日飽きもせず、口がさない輩ではある」

「ちつムカつくな。今度は俺を連れてってくださいよ。がつんと言ってやる」

掌に拳を当てながら、腹立たしげに室内を歩き回るクライフを眼で追って、フレイザーが苦笑交じりの声をかけた。

「我々の立場では臨席できないのよ。仕方ないでしょう」

基本的に正規、師団全体にかかる軍議に出席が認められるのは、大隊の副將までだ。その規定でいけば出席者は圧倒的に正規軍側が多い事になる。それもクライフには不満だった。

ヴィルトールが自席に着いたまま、クライフを見上げる。

「お前までそんな事でどうするんだ？ 大体お前が出たら、余計面倒な事になるだけだよ」

「だから黙ったままでいられねえだろ。第一、下にまで広がっちゃってギスギスしてんだ。さっきなんて乱闘寸前だぜ？」

クライフが食堂の一件を掻い摘んで報告すると、グランズレイは苦々しい息を吐いた。

あの場ではひとまず収まったものの、全体的な問題は解決したとは言えない。上層部の不協和音が確実に隊内にも伝わって、普段なら気にならない事まで不和の要因になっている。

このままの状態が続けば、兵達の不安はますます大きくなっていくばかりだ。

フレイザーが与えた安堵も、このままレオアリスなりが動かなければ、時もなくまた焦燥と疑念に変わってしまうだろう。

「批判を言わせねえか、軍を出すか、せめてどっちななんねえと収まりませんよ」

しかしグランズレイはクライフに同意せず、厳しい表情のまま首を振った。

「上將が黙っておられるのだ。我々が下手に口出しすべきではない。だがいつもの批判に過ぎん」

「つたく、正規にやそんな時じゃねえって、誰も言う奴はいねえのかよ」  
それまでは口を開かずその様子を眺めていたロットバルトは、グランズ

レイに蒼い瞳を向けた。

「それだけですか」

「……何がだ。」

「何。それ以外にまだあんの？」

東の間、ロットバルトはグランズレイに視線を注いでいたが、すぐに口元に微かな笑みを浮かべた。

「いえ。……私も、少々苦言を申し上げるべきと思いますが。それに、批判についてはいずれにせよ結果を出せば消えていく話ですが、意識に碍かれた種が芽を出してからでは、刈り取るのは困難でしょう。……兵にも一定の情報は必要ですよ」

グランズレイは一度その瞳を見返しただけで、何も言おうとはしない。代わりにクライフがグランズレイに抗議の籠った視線を向ける。

「ロットバルトの言うとおりだ。上将が黙ってたって、副将から苦情ぐらい言ってくださいよ。放つとくからどんどん広がってくんず」

「俺が何だって？」

丁度その時、王城から戻ったレオアリスが入り口で立ち止まり、執務室内の様子に驚いた瞳を向ける。陰悪という程では無いにしろ、どこか睨み合うような雰囲気がある。

「何かあったのか」

「上将が批判を受けてるってのに、黙ってる事は無いって話です」

「……ああ」

不服そうな色を隠さないクライフの様子に苦笑を漏らし、レオアリスは室内を横切って自分の執務机まで行くと、ひよいと机の上に座った。

「別に。気にしても仕方ない」

「腹立たないんですか？ 俺は気に食わねえっすよ。俺らの大将を何だと思ってるんだ」

本気で怒っているらしいクライフを眺めて、レオアリスは宥めるように笑った。

「落ち着けよ。……まあ、お前らには悪いけど、少し我慢してくれ」  
「俺達はいいんです。そうじゃなくて」

クライフは尚も言い募ろうとして、レオアリスの瞳に浮かんだ光に気付き、漸く息を付いた。バインドの件が片付けば、今持ち上がっている批判も少しは減るのだろう。その瞳は、自分がバインドを斬るのだと、見る者に告げている。

ただそれは、安堵の他にもう一つ、一瞬の戦慄に近い感覚をクライフに与えた。

「……判りました。上将にお任せします。でも、早いとこ決着つけてくださいよ。正規の奴等も結果を見せりや納得するしかねえでしょうし」

クライフが退るとロットバルトが入れ代わりに進み出て、書類を手に彼らを見渡した。演習の布陣図だと気付いて、クライフは呆れた声を上げた。

「こんな時でも演習やんのかよ」

「バインドに動きが無く、事態が師団の管轄下に無い以上、我々の打つべき手は態勢を整えておく事以外に無いでしょう。必要以上に特別な行動を取る事もない」

「俺はどっちかつつと、バインドがさっさと動いて実戦になった方がいいな。その方が兵も落ち着くんじゃないか？」

クライフにしてみれば、いつもの軽口程度の発言だった。

「軽々しい事を口にするな！」

鞭を弾くような響きがあった。予想外に厳しい口調に、クライフだけではなくその場の全員が、グランズレイに驚いた視線を向ける。

「え……つと、——申し訳ありません」

クライフが圧されたように頭を下げる。レオアリスは黙ったまま、グランズレイの僅かに逸らされた横顔に視線を注いだ。グランズレイの表情には、どこか苦しい色がある。

だが、それ以上の変化が無いのを見て取り、レオアリスは微かな苛立ちの交じった溜息をついた。

バインドが王都に現れてから、四日目の朝を迎えた。

薄紫と輝くような朱が入り交じる明け方の空は、地上でどんな事があるかと、ただ色を移ろわせていく。

窓の向こうに変わる事なく上がる朝日を眺め、レオアリスは溜息をついた。記録を調べる事しかできていないにも関わらず、疲労は日々積み重なるように身体に纏いつている。

浴室に行き、蛇口を捻ると壁面に設けられた管から勢い良く水が降り注ぐ。部屋着のままなのも構わず、頭を突っ込むようにして水を被った。

明け方の冷えきった水が肌を叩き、寝不足気味の頭が漸くすっきりとしてくる。雨のように注がれる冷たい水の中で、浴室の壁に片手を当てたまま、瞳を閉じた。

今日は公休日に出た。午前中の時間を利用して、王立文書宮へ行ってみるつもりでいた。そこで何もなければ、自分一人の力で探れる範囲は、探し尽くした事になる。

その後、どうするか……。

単純に、やはりただの偽りだったと切り捨てる手はある。いっそそうして蓋をしてしまいたい誘惑は強かった。

けれど、ずっと引っ掛かっているのは、グランスレイの様子だ。

昨日のグランスレイの姿が脳裏を過る。

何を知っているのか。——何故、黙っているのか。

その事がずっと、レオアリスに煩悶を投げつけていた。

勢い良く注いでいた水を止め、滴る雫ごと煩悶を振り払おうとするように頭を振った。

身支度を整えて表に出ると、既に夜明けの色は消え、良く晴れた高い空が見渡せる。通りに沿って右手には官舎の塀が延び、左側は常緑樹の植え込みが続いている。秋の日差しが樹々の葉や石畳に照り映え、冷えた大気を少しづつ暖めていた。

館の門を出て少し歩いた所で、レオアリスは足を止めた。そこが、バイ

ンドと初めて遭遇した場所だ。まだ舗装の亀裂もそのままになっている。深く生々しい傷を晒しているものの無機質に語らず、そこから得られるものは無い。

引き寄せられる視線を振りほどき、レオアリスは第一層へ向かった。

早い時間にも関わらず、執務室には既にロットバルトの姿があった。ロットバルトは不意に入ってきたレオアリスの顔を見て、意外そうに眉を上げた。

「どうなさったんです、随分お早いですね。それに今日は公休では？」

「さすがにこんな時にのんびり休んでる訳にはいかないからな。情報は？」

「未だ変化はありませんね。どうせ軍議があっても大した内容でもないでしょう、息抜きくらいされても文句は言われませんよ。遠乗りにも行かれたら如何です。カイを置いていっていただければ、緊急時でも連絡は可能でしょう」

「そうだな……」

ハヤテは王城への行き帰りばかりで、すっかりふてくされた様子だ。心引かれた様子で少し考え込むように黙ったレオアリスに一度視線を向けてから、ロットバルトは書類を整えて卓上へ重ねて置いた。

「申し訳ありませんが、私は午前中に少々時間を頂きます」

「用事か？」

ロットバルトの手元に積み上げられている書類の山を眺めながら、何か急ぎの案件があったらどうかと、レオアリスは特に意図も無く聞き返した。

返った言葉に、視線を引き上げる。

「シスファン大將が、昨日から帰還されているそうです」

「シスファン——」

一度それを口の中で反復してから、思いがけない名にレオアリスは驚いて瞳を見開いた。

「まさか。昨日の軍議じゃ、何も言って無かったぜ。第一軍議に出席してない」

「そのようですね。私も表立って聞いた訳ではありませんが、辺境を空けて秘密裡に帰還するだけの理由があるのでしょうか。……今回の件と無関係とは考え難い」

正規東方軍第七大隊大将、レベッカ・シスファン。第七軍、いわゆる辺境軍を統括する彼女が、アスタロトや軍の召喚がなく帰還する事は考えられない。

ロットバルトの言うとおり、秘密裡に、重大な案件を以て召喚されたと考えるのが妥当だろう。

バインドの件に関わりがあるのだろうか。

(この時期だ。それ以外……)

どこが、何の為にシスファンを召喚したのか。

『剣士と向き合うのは、いつ以来かな』

不意に、いつかのシスファンの言葉が耳を打った。

鼓動が早まる。

確かに、シスファンはそう言っていたはずだ。

その時はただ額面どおりに受け取っていたが、今その言葉は、無視できない響きを孕んでいた。

「――」

バインドの事を知っているのか。――十七年前を？

早い鼓動に合わせるように、目まぐるしく疑問が入れ替わる。

答えへの期待と不安。

レオアリスは逸る気持ちを押さえ込むように、両手を握り込んだ。

(……会って、話を――)

けれど、秘密裡に上がっているのであれば、通常の面会を求めてもはぐらかされるだけだ。

ロットバルトは暫くその様子を見ていたが立ち上がり、執務机を回ってその前に出た。

「面会の申し入れは受け入れて戴いています。任せて戴いても？」

跳ねるように顔を上げ、レオアリスはロットバルトを見上げた。整った面に浮かんだ表情は、普段と少しも変わっていない。

レオアリスは僅かに躊躇った。

バインドの言葉に捉われ過ぎていると自分でも判っている。けれど、それを自分の中でどう方向付ければいいのか、それが未だに見えていないのだ。

しかし自分には政治的な駆け引きなどは向かない。例え面会したとしても、無駄に終わるだろう。ロットバルトならその術に長けている。

「――何を聞けばいいか、俺にもはっきり判ってない」

まだ迷ったままのレオアリスに対し、ロットバルトは対照的な表情を浮かべた。

「無論、明確な指示を出される必要はありません。逆に現時点では、個人の範疇で動いている事に留めておいた方がいいでしょう」

ロットバルトは特に急かすでもなくそう言うのと、執務机の縁に軽く身体を預けた。

この三日間、迷うだけ迷って来た。それで何が前進した訳でもない。

レオアリスは深呼吸をするように、大きく息を吐いた。

「……頼む」

口にしてみて漸く、胸の裡に重くわだかまっていたものが、僅かだが軽くなった気がする。

ロットバルトは頷くと、先程卓上に置いた書類を取り上げ、レオアリスへ差し出した。

「せっかく出ていらしたのなら、ご確認を」

レオアリスが受け取ると、口元を皮肉っぽく歪める。

「調査報告と申し上げたいところですが、残念ながら何も得られておりません。午後まで待つて戴くしかありませんね。この後のご予定は？」

「王立文書宮に行くつもりでいる。……一つくらいひっかかるかもしれないしな」

期待半分といったところだ。ただ先程までは無ければ手詰まりになると思っていたが、今はもう一つ別の道が開けている。

「可能性はあるでしょうね。では、午後に館にお伺いして、ご報告いたしまししょう」

「……スランザールに話を聞くのが早いかな」

「さて……話が伺えれば非常に有益でしょうが、口を開いたら開いたで、あの方の講義はきりがありませんからね。まあ、お戻りが明日にならないようにお気をつけください」

ロットバルトの的を得た物言いに可笑しそうに笑い、深く頷いてからレオアリスは手にした数枚の綴りを開いた。

そこに記されているのは、主に内務官房の人事関係者の名だ。既に引退した者や現在別の部署へ異動している者の名もあるが、基本的に軍部の人事に関わっていた者のようだ。

「情報が無すぎますね。表立って聞く事が出来ない分、拘束力が弱いのは仕方ありませんが……」

レオアリスはそれを閉じ、一度壁に掲げられた師団の軍旗に瞳を向けた。誰かを頼るのなら、自分もそれに対して誠実であるべきだ。

「俺の持つてる情報が、少しならある」

レオアリスとしては、ずっと一人で持っていた事に後ろめたい気持ちがあったが、ロットバルトは意外な顔もせず、蒼い瞳を促すように細めた。

半刻後、レオアリスは士官棟を出ると、今度は王城へと向かった。

ハヤテを厩舎に預け、正門を潜る。見上げれば、王城の尖塔は首が痛くなるほどに高く聳えている。

王がそこに座す事を考えると、こんな状況でさえ、確実に心が浮き立つのが判る。

### 『仇の』

浮かんで来ようとするざわめきを押さえ、唇を引き結ぶと、レオアリスは高い扉を通り抜けた。

正面の広く長い階段の横を抜け、長い廊下を何度か曲ると、王城の中庭に造られた回廊に出る。

その先に、王立文書官があった。

白い花崗岩を格子状に組み合わせた回廊の壁面からは、左右に美しく整

えられた中庭が広がっているのが見える。紅葉した樹々と秋の草花、常緑の植え込みが均整を取って配置されていた。

この辺りで行き交うのは、多くは文官達と王立学院の学士や学生達だ。時折いかにも意外そうな視線が、士官服姿のレオアリスの上を過ぎていく。

回廊は途中で十字に交差して分かれている。レオアリスはそのまま正面の道を進み、行き止まりにある両開きの扉の前に立った。扉には知の象徴を表す意匠である、葉を茂らせた年経た樹木が一面に彫られている。

外側に取っ手は無く、レオアリスは扉に両手を置いて、重く大きな扉を押し開けた。

軋んだ音を立てて開いた扉の奥には、天井の高く取られた広間が左右に広がり、天窓から差し込む幾筋もの光と舞い散る埃の中に、壁にずらりと並べられた書物を浮かび上がらせている。両奥の壁には、それぞれ次の間へ続く、上部を弓状に作られた通路が設けられていた。

この蔵書量は師団文書保管庫の比ではない。この国の開闢当初からの膨大な量の書物や記録が、文書官の幾つあるのかすら分からない部屋の一つ一つに整然と収められている。そしてその管理官スランザールもまた、王城の諸官達の間では、開闢と同時にここにいるのだと冗談混じりに噂されていた。

それほど彼の知識は深い。うっかり何かを尋ねようものなら、朝に来たはずが気付けば深夜を迎えていたという事もしばしばあった。

スランザールはその知識故に古くから王の相談役を務めている。王と同じく、気の遠くなるような歳月を記憶している者の一人だ。他には大公ペー

ル、少し降って同じく四大公の一人、ルシファアがいる。

同じ四大公であっても、アスタロトやベルゼバブは既に数代の代替りをしており、ベルゼバブはその名を受け継いでから既に数千年の時が経過しているが、アスタロトの継承式が行われたのは、つい数年前の事だ。レオアリスやアスタロトなどはその歴史からすれば、まだまだ生まれでもないといとさえ言えた。

レオアリスが扉の正面に置かれた机に近づくと、スランザールは分厚い書物に突っ込むようにしていた顔を上げ、首を突き出すようにして小さい

目を更に眇めて、皺に埋もれた真つ白な眉を動かした。長く豊富な髭が口元を覆い隠しているため、その声はいつもくぐもって聞こえる。

「ずいぶんと久しいの。お前のような小僧っ子はもっと進んで知識を身に付けねばならん。それを怠るとは何事か。たるんどる」

「いきなり説教かよ。忙しかったんだって」

「それがたるんだる証拠じゃ。寝食を惜しんで勉強に勤しまんか」  
「相変わらず口うるせえなあ」

レオアリスは眉をしかめたが、本気で煩わしいと思った事はなかった。威厳と愛敬が同居しているせいも、相対するといふ笑いが込み上げてくる。

こんな時に自分でも驚くほど気持ち軽くなっている。一歩か半歩か、前進している気がしている事もあるが、目の前の存在が持つ空気のせいもあつただろう。

この老公はどこか、故郷の育て親に似て懐かしい。

「なあ、爺さん」

「スランザール様と呼ばんか、無礼もん。第一お前のような不勉強者の孫を持つた覚えはないわ」

スランザールはレオアリスよりふた回りも小さい姿で、胸を反り返らせた。だが幾重にも重ねた長衣から突き出た腕は枯れ木のように細く、皺と長く白い髭に覆われた顔は、あまり威厳があるとはいえない。

「様って玉かよ。それより聞きたい事があつて来たんだ」

「自分で調べてから来んか。普通は下調べをした上で、尚且つ分からないところに関してのみ、目上の者に聞くものじゃ。丸投げで聞こうとする時点であつたらんわ」

「調べたよ。全然出てこねえ。だから、ちよつと頼る事にした。だったら爺さんに聞くのが一番だろ？ 何だつて知ってるじゃないか」

スランザールはその言葉を聞いた途端、にんまりと満足そうな表情を浮かべた。

「ふん。して、何が聞きたい」

ほつと息をつき、身体を乗り出す。

「バインド。俺と同じ剣士で――」

「ほああ！」

突然奇声を上げたスランザールに、レオアリスは思わず後退った。ぽかんと口を開けたまま、まじまじとスランザールを見つめる。周囲で書物を閲覧していた幾人かも、何事かと驚いた視線を向けている。

「……な、何だ？」

「わしや忙しいんじや。もう行け、あつちへ行け。こんな所で油を売つて暇があつたら仕事をせえ」

せかせかとそう言うと言うと椅子から飛び降り、広げていた本を掻き集めるようにして小さい身体に抱え込み、さつさと机の奥の扉に消えようとする。

「ああ？ ……ちよつと……おい、待てつて！ ——じじいっ！」

あつけにとられて見送りかけていたレオアリスは、慌てて机を飛び越え、スランザールの服の裾を掴んだ。

「こりや、離さんかい！ このスランザール様の服を掴むなんぞ、数百万年早いわ！」

「あんた生まれてねえだろうっ！ って、そうじゃなく！」  
じたばたと細い手足を振り回して暴れる老人を、何とか机まで引き戻す。

「無礼もん！ か弱い老人を何だと思つとるんじやっ」

やつとの事で椅子に座らせると、スランザールは膨れつ面でレオアリスを睨み付けた。

「あのなあ……。信じらんねえな、もう」

思わずレオアリスは肺の空気を全て吐き出すような溜息を漏らした。これがこの国の頂点に立つ大賢者の取る態度だろうか。

「……いいから、教えてくれよ。知つてんだろ」

「知らん」  
スランザールはまるつきり駄々をこねる子供のようになり、レオアリスから顔を背ける。

（――俺、ここに何しに来たんだっけ）

夜明けを眺めた時の気分と今の状況では、数刻しか経っていないとは思えない程だ。

机の上に両手をつき、そつぽを向くスランザールに頭を下げる。

「頼むよ。スランザール様」

「知らんっ」

レオアリスは大きく息を吐き、身体を起こすと、スランザールの皺ぶいた顔を見下ろした。

「ふうん。あ、そ。知らねえんだ。情けねえなあ、知のスランザールともあろう者が、知らない事があるなんてな」

「何を言うか、このわしに知らぬ事などない！」

レオアリスの挑発に心底憤ったと言わんばかりに、スランザールの枯れ木のような手が古びた机をばんばんと叩く。レオアリスは、に、と笑みを刷いた。

「じゃ、教えてくれ」

スランザールは釣られたように口を開きかけたが——不意に厳しい表情を浮かべて再び閉ざしてしまった。

「爺さん」

促すようにレオアリスが呼んでも、じっと落ち窪んだ瞳を向けたまま、動こうとしない。

「……何だよ」

黙ったままの老人にレオアリスは眉根を歪めた。

また、同じ反応だ。誰もが同じように口を閉ざす。

「一体皆、何を隠してるんだ。バインドって名前に何がある？」

「知らなくて良い事もある。」

「知らなくていい？ 奴は剣士で、俺を知っていた。知らなくていい事なんて無い」

睨み付けるレオアリスの視線を、スランザールは無言で受け止める。レオアリスは纏い付く何かを振り払おうとするかのように、握り込んだ拳を鋭く振った。

「いい、自分で調べるさ」

「記録など無いよ」

足音も荒く書庫へ向おうとしていたレオアリスは、その言葉に老公を振り返った。スランザールの真っ白い眉の下の小さな眼には、どこか思わし

げな光がある。

「過去など、逐一掘り返さずとも良いものじゃ。掘り返したところで、後悔しか生まれぬものもある」

「——そうやって誰も彼も上っ面ばかり言うな。それで気にならない訳がないだろう。」

「お前自身の為じゃ」

「——俺の為、か」

レオアリスは一度だけスランザールに視線を向け、踵を返した。

「だったら皆、やり方を間違えてんだ」

「何だ、暗い顔してんなあ」

鈴を振るような悪戯っぽい声がかかって振り返れば、アスタロトが王城と文書宮を繋ぐ回廊を歩いて近づいてくるところだった。

相変わらず軍服は着ていない。首に巻いて背中流した繊細な織りの白い布。前の開いた同じ白い長衣の下に、丈の短い青の上下を合わせている。

首や肩、腕に纏う銀の装飾品が歩くのに合わせて微かな音を立てる。

「尤も、連日あんな会議じゃ暗くなるのも無理ないか。私ももう疲れた」

レオアリスはそれには曖昧に頷いて、アスタロトが自分の前まで来るのを待った。純白の花崗岩を細く繊細に組み合わせ光を取り込んだ回廊に、

アスタロトの艶やかな髪が鮮やかだ。

「気にすんなよ。奴らだって分かってんだ。お前の剣を止められるヤツが、

軍にどれだけのいる？」

そう言うてから、アスタロトはレオアリスの表情に眼を止め、首を傾げた。黒い艶やかな髪が肩にさらりと零れる。

「……それが気になってんじゃないんだ？」

回廊の白い格子壁に寄りかかり、レオアリスはアスタロトを見た。

アスタロトの様子はバインドが現れる前も後も、あの軍議の中でさえ、

全く変わらない。

多分アスタロトも知らないのだろうと思いつつも、レオアリスは問い

掛けた。

「——お前、十七年前の事ってなんか知ってるか？」

レオアリスの問いに、案の定アスタロトは長い睫毛に縁取られた瞳を丸くする。

「十七年前？ 知るわけ無いだろ。お前私をいくつだと思ってるんだ。お前と同じ年だぞ。他のヤツに聞けよ、ベールとか、ファーとかさ。あいつら無駄に長く生きてんだし、知ってんじゃないん？」

呆れたように細い肩を竦めると、剥き出しの肩にかかる細い鎖がしやりと音を立てた。

アスタロトの言うファーとは、同じく四大公の一人、西方公ルシファアの事だ。レオアリスもこれまで幾度か面識を得てはいたが、四大公などそう簡単に会える相手ではない。アスタロトが特別なのだ。

「大体、十七年前の何についてな訳？」

「よく分からないが、多分師団」

シスファンの事を問おうかとも思ったが、思い直した。それはロットバルトに任せてある。アスタロトも目に見える言動ほど実質は無軌道な訳ではないが、嘘の上手い方ではない。

もしシスファンの喚問がアスタロトの預かり知らない所で行われているとすれば、正規軍に余計な亀裂を与えかねない。今は少しずつ動いた方がいいと、そう思った。

「はあ？ そんな事しかわかんなくて聞いてんの？ おおざっぱなヤツだな」

「お前に言われたくねえな」

アスタロトは軽やかに、舞踊を踏むように回廊を抜け、大広間を過ぎ、警備の立つ扉を出る。扉を警護していた近衛兵が一人に向かって敬礼する。

アスタロトが話しながら先に立ってどんどん歩いていくため、レオアリスは自然、アスタロトの後を追うような形で王城の正門に向かった。

「それじゃ、師団のヤツに聞けばいいじゃんか」

「……聞いた」

ちらりと紅い瞳だけを向ける。

「ふうん。……なあ、どっかいこうぜ」

ふいにくるりと振り返ると、レオアリスの腕をわしっと掴み、ぐんぐんと引つ張って歩き始める。

「ちよつと……待てよ、おいつ」

「いいところあるんだ。最近お気に入りで、しょっちゅう行ってんだけど、お前まだ行った事ないだろ？」

「待って。今はそんな時じゃねえだろう。それに俺ちよつと用事が」

空を見上げれば、太陽は真上近くに昇っている。午後にロットバルトが戻れば、何がしかの答えが聞けるだろう。出来れば館に戻っていたかった。

しかしアスタロトは腕を離す気配はない。

「堅いことばっか言ってるから、そうやって暗い顔になっちゃうんだ。大体こうして待ってて事態が変わるか？ 事態起こしてんのは私達じゃない。もし何かあれば知らせが来るさ」

会話の途中も足を緩めず、アスタロトはずんずんと黒い玉石の敷かれた道を進んでいく。先日とは逆に、レオアリスは半ば引きずられるようにアスタロトの後を歩くはめになった。

「上将？」

正門から王城内に向かう途中だろう、丁度通りかかったヴィルトールがその様子に驚いた顔を向けて足を止める。

「これは、公。ご無沙汰しております。で、上将、どちらへ？」

アスタロトに一礼し、ヴィルトールが首を傾げる。

「アスタロトに聞いてくれ……」

「よく言った！」

諦め半分のレオアリスの言葉にっこり微笑んで、アスタロトはヴィルトールに手を振ってみせた。

「ちよつと借りる。上層の『アル・レイズ』に行くから。知ってんだろ？」

「は？」

「近いし、後で返すから心配すんな。じゃなく」

言うが早い、レオアリスにもヴィルトールにも口を挟む暇を与えず、

アスタロトはレオアリスの腕を掴んだまま、さっさと正門に向かって歩き

出した。ヴィルトールがあっけに取られている間に、正門の外に消える。

「……あの方に捕まったら、暫らくは戻らないだろうな……」

ぼそりと呟いて、今の事を見なかった事にすべきか否か、ヴィルトールは僅かに思い悩んだ。グランズレイはまた溜息を吐くだろうが、

「ま、公が相手じゃお止め出来なかったのも無理はない。正直に報告するか」

再び歩き出したヴィルトールは、目の前にある場内への巨大な扉に目をやり、自分の用件を思い出してグランズレイの代わりに溜息を吐いた。

「内務か。どうせなら私じゃなく、ロットバルトを召喚してくれば良いものを」

正門の脇で衛士と談笑していたアーシアが、アスタロトに気付いて顔を上げる。

「アスタロト様。ずいぶんとお早いお戻りですね」

それから背後のレオアリスに改めて気付くと、にこりと柔らかい微笑みを浮かべた。

「レオアリスさん。こんにちは」

「お前も元気そうだな、アーシア」

レオアリスが疲れた様子をしているのに気付いて、アーシアは心配そうに眉根を寄せた。

「随分お疲れのようですね。やはり今回の件に関して、お忙しいんですか」

「つていうより、お前の主人のお陰でなあ」

「はは。それは、もう……諦めていただくしか」

小首を傾げて爽やかな笑みを浮かべた少年を眺めて、レオアリスは改めてがっかりと肩を落とした。

「アーシア。『アル・レイズ』に行くぞっ」

「ええ？ よろしいんですか？」

「いいも悪いも私が決めるの。こいつの話、聞いてやんなきゃいけないし

な」

アスタロトが細い顎を振り向け、改めてレオアリスは彼女をしげしげと眺めた。ただ気のままに動いている訳でもないかと判つていながら、アスタロトには時折驚かされる。

自分を見つめるレオアリスに対し、アスタロトはいつもの得意そうな笑みを見せた。

「さて、外門まで出るのもめんどくさいし、このまま行くか」

「……このまま？ 俺、ハヤテが……」

レオアリスが皆まで言い終わる前に、左腕にアーシアを抱え込み、右手でレオアリスの腕を捉えたまま。

アスタロトの姿はその場から消えた。

入り口で迎え出た家令は、廊下に立つ被きの奥の顔を確認すると、黙って深く頭を下げた。先に立って部屋の奥へと進み、一つの扉の前で足を止める。

家令が扉を押し開くと、薄い陽光の落ちた部屋の中で、女が一人振り返った。癖の無い黒髪を耳の下辺りで切り揃え、きつく釣り上がった切れ長の瞳は黒、女性特有の柔らかさは少ない。身に纏っているのは私服だが、傍らの卓上にはよく手入れを施された長剣が置かれていた。

来訪者が外套を脱ぎ一礼すると、現れた整った顔を眺め、女は赤い口元に笑みを刷いた。

「久しいな、半年振り程か。と言ってもこれでまだ二度、いや、三度の面会でしかないが」

「先のミストラの一件ではご助力を戴きました。この度は急な申し出にも関わらず、面会をご了承戴きお礼を申し上げます」

それには鷹揚に頷き、正規軍東方第七軍大将レベツカ・シスファンはロットバルトに窓際の椅子を薦め、自分もその前に座った。

薄い陽光以外に光源の無い部屋では、二人の姿もその間に置かれた円卓も墨絵のように映る。窓越しに覗く常緑樹の枝葉が、風にざわざわと身を揺すっていた。

家令が茶器を二人の前に置き部屋を辞すと、シスファンは椅子の背に深く預けていた身体を起こした。

「卿がわざわざ訪ねて来るとは思わなかったな。使者を戴ければ館まで出向いたものを」

シスファンは円卓に両肘を付き、組んだ手の中から黒い瞳を閃かせるようにロットバルトの瞳を覗き込んだ。探る瞳の色にも、ロットバルトはただ笑みを返す。

「師団参謀官としての用件ですので、こちらから何うのが筋でしょう」  
「ふん、そっちな。つまらん事だな。二人きりで密会など、王都の女ども

に恨まれるとヒヤヒヤしていたんだが」

「貴女にご迷惑が掛からないよう、顔を見られない配慮はしております。そのご心配はご無用ですよ。ここに貴女がいらつしやることも、他に知られる懸念はありません」

シスファンはじつとロットバルトを見てから、気持ちの良い響きを立てて笑った。

ここはシスファンの官舎でも私邸でもない、王都の上層部にある宿の一室だ。閑静な街中に建つそこは、訪れるにも離れるにも、人の目に立たない造りになっている。

「甘い期待を掛けていたのに残念だ」

それから今までの会話とは打って変わって、低く声を落とす。

「良く私が王都に来てると判ったな。公式にはサランバードを離れてはいないのだがな」

サランバードはシスファンの第七軍が駐屯する、東方最大の軍都だ。東の辺境、ミストラ山脈を擁するミステイリア地方一帯の治安を担っている。ミストラ山脈での一件の折り、ロットバルトはサランバードを訪れ、シスファンと面識を得ていた。

「少し聞き及んだもので。……この度のご用件は査問、ですか。内務の」  
シスファンの瞳に浮かんだ光が鋭さを増す。

「——侯爵から聞いたのか」

ロットバルトはただ笑って、シスファンの想像するに任せた。

軍が辺境からシスファンを召喚する場合、通常アスタロトの命で動くが、アスタロトは秘密裡を好むまい。この件に関しては尚更だ。

となればシスファンを喚問出来る権限を持つのは、他に内政官房しかあり得ない。それもごく上層部に限られる。

ヴェルナー侯爵がそうした情報を単なる血の繋がり程度で洩らすとは、ロットバルト自身が最も考えていないところだが、それを敢えて否定してみせる必要はなかった。手にしている札は多く見えるに越したことは無い。

「私も、全てを聞いている訳ではありません」  
口を閉ざし、促すように自分に視線を向けたロットバルトを眺め、シス

ファンは身体中の息を吐くようにして椅子の背凭れに身を投げた。

ロットバルトがここを訪れた理由は察しが付いている。面会を受け入れた以上問いかけをはぐらかす気はシスファンにはないが、それにどこまでどう答えるべきか、そこを自問していた。

「それで？ 私が何を知っていると考えているんだ？」

ロットバルトは目札だけを返し、その蒼い瞳をシスファンの上に留める。

「内務での喚問案件は、先のミストラの一件でしょう」

シスファンは少し剣呑に片眉を上げたが、躊躇無く答えた。

「そうだな。」

「師団第一大隊大将に関わる件ですね」

「……どこまで知っているのか……。私に聞く必要があるのかな」

「推測に過ぎませんよ。ただ」

ロットバルトはシスファンの反応を子細洩らさぬような色を蒼い瞳に宿す。一見穏やかな瞳の中にある冷えた光に、シスファンは苦い笑みを微かに浮かべた。

シスファンは持って回った言い方は好まない。目の前の男に全く取り繕う素振りが無いのは、自分に対しては単刀直入が一番有効だと見抜かれているからだろう。

「ご存知の通り、現在王城は侵入者の件で少々騒めています。侵入者は剣士ですが、ただ剣士というだけには、周囲の口が重すぎる。なにがしかの裏があると言っているようなものだ。そこへ、貴女が非公式に王都に帰還されたとあれば、私としては結び付けて考えざるを得ない」

シスファンは黒い瞳を細めた。

「結び付ける。何に」

室内の空気が張り詰めるのが判る。窓の外では相変わらず、樹々の穏やかな葉擦れの音が続いていた。

「バインドと軍との関わりを、です」

事も無く告げられた声に、シスファンは一呼吸置いてから、長椅子の上の脚を組み直した。

「――」

「査問の内容については詳しく伺う事はしません。大方の設問は予想が着きますし、私の管轄ではありません」

ミストラに残した情報も多くはない。そこから得られる情報だけなら対処は可能な範囲だ。

「では何を聞きたい」

「バインドはあの日、我が大将に幾つかの言葉を残しています。その全てが真実かは判りませんが、十七年前という鍵がそこにある」

「聞いていないな。捜査上の重要な要素となるものを秘匿しているとは、軍法会議ものだぞ」

シスファンの咎める響きにも、ロットバルトはただ笑った。

「第一回目の軍議でバインドに関する言及を断たれているのですから、単に機会を逸しただけですよ」

「……その程度で済むと……」

「済ませましょう」

事もなく言い切ったその顔を呆れた瞳で眺め、シスファンは続けさせるために片手を振った。

「貴女は第七軍の大将として、既に十七年前にはサランバードにおられた。ご存知でしょう」

「女の歳を測ろうとは、意外に女の扱いを知らないのではないか？」

「興味があれば伺いもしますよ」

小手先程度の会話は思案の間が欲しいからだが、苦もなくやんわりと返され、苦虫を噛み潰したように眉をしかめる。

「教えて戴けますか。十七年前に、何があったのか」

「知らないと言ったら？」

ロットバルトは一度反らした瞳を、静かにシスファンに注ぐ。浮かんだ光に、逆に厳しい札を引かせてしまった事に気付き、シスファンは内心で額を打った。

ロットバルトはシスファンの内心を見透かすように、口元に薄い笑みを刷く。

「貴女は以前、我が大将を前にして、こう仰った。――剣士と対峙するの

はいつ以来か、と」

シスファンは益々眉をしかめ、今度は実際に額を右手につくと視線を窓の外に逃がした。

「全く、迂闊な事を口にするものではないな」

「非常に有益な示唆でしたよ。だが、調べても貴女が剣士と対峙した公式な記録は出てきません。いつ、どこでか。……何という名の剣士か……」

「——」

シスファンは身体をずらして深く腰掛け、上体を僅かに乗り出して正面からロットバルトの瞳を見つめた。

「聞いたところでどうする」

「現時点で必要なのは情報です。情報が無ければ対応のしようもない」

「例え事実が彼に不利なものであっても？」

「この状況下で、優位なものが出てくるとは思っておりませんよ」

「——」

束の間の沈黙に重なるように、樹木の騒めきが届く。よく耳を傾ければ、丁寧を整えられた小ぶりの庭園に遊ぶ小鳥達の囀りも聞える。シスファンの瞳が轉りの主を探すように、窓から見える梢の揺らめきを追った。

こんな穏やかな情景の中では、十七年前の出来事はまるで遠い夢の中の事のように感じられた。

ただしそれは、悪夢だが。

脳裏にあの男、バインドの冥い笑みが過る。いつだったかバインドと対面した時、あの男が纏う闇にぞっとした。

全ての事が終わって思い返せば、あれは狂気だったのだろう。

(いや……終わったと思っただけか)

追憶を振り払うように、シスファンは一度息を吐いた。

「——十七年前まで、バインドは確かに、我々に関わりがあった。軍として、日常的にな」

「どのような関わりです」

「それ以上語る口を持たん。記録も出まい。……そういう事だ」

そう言っって口を閉ざしたシスファンの上には、語る意思の無いことが明

確に読み取れる。だがそれは言葉よりも雄弁に、ロットバルトにある事を伝えている。

「——成程」

シスファンの対応は、この状況に於いて非常に好意的と言えた。全く対応もせず、一言知らないと言っって通せば、ロットバルトにはそれ以上の追及は職位上できないからだ。

ロットバルトの問いかけを完全に否定しない上で言及を避けるのであれば、そこに明白な理由があるのだろう。シスファンが口にする事を避けなければならぬ理由が。

(ここまでか)

得られた情報は乏しいが、示唆された背景は大きい。

退意を告げようとした時、視線を窓の外に投げっていたシスファンの、独り言のように呟いた言葉が耳を打った。

「……十七年を経て、バインドは過去の亡霊ではなくなった。もはや時間の問題だろうな」

それ以上は何も言わず、手の付けられる事無く冷え切った茶器の上に視線を落としている。

「——有難うございました。お手を煩わせて恐縮です」

ロットバルトは丁寧に頭を下げ、それから立ち上がった。

「いいや。まあ有益な時間の使い方ではあるさ。卿との面会は面白いし、何より眼福だ」

鬚りの無い口調でそう言うと、ロットバルトの後を追っってシスファンも席を立つ。

ロットバルトは今までと変わって、魅惑的な笑みをシスファンへ向けた。

「今度は、また別の折にお時間を戴きたいものですね」

どこまで本気なものかと内心苦笑を覚えながらも、シスファン目の前の

整った顔を見返した。

(迂闊に乗ったら痛い目を見そうだ)

「その時には仕事の話は無しにしてもらいたいものだ。卿とは厄介な件でしか会っって無いからな」

「そうさせて戴きましよう」

シスファン喉の奥で笑うと、扉の外に声を掛け、家令を呼んだ。すぐに応える声が返り、足音が近づく。

「最後にあと一つ、お聞かせ願いたい」

ロットバルトは振り返り、すぐ隣に立つシスファンと向かい合った。

誰もがこの件に関して示す反応がある。少しずつ異なりはしたが、その根底には同種の感情が流れているように思える。

「剣士という種……いえ、存在にと言うべきかも知れませんが……。あなた方が抱いている感情は、一体何です」

シスファンは束の間ロットバルトの瞳を見返してから、自嘲を含んだ笑みを浮かべた。

「——恐怖さ」

九

士官棟への通りを歩くロットバルトの姿を認め、クライフは走り寄ってその肩を叩いた。

「ロットバルト！ どこ行ってたんだよお前。探してたんだぜ。ヴィルトーも気付いたらいねえしさ」

「少し私用で」

ロットバルトが歩いてきたのは城下に出る外門のある方向だ。その方向とロットバルトの顔を見比べ、クライフはにやりと笑った。

「私用？ まさか女に会いに行ってたとか言うんじゃないだろうな」

「当らずとも遠からず、ですね」

「マジで！？ お前なあ、勤務中だぞ」

ロットバルトの口振りにはまるで作戦行動を読み上げるようで、冗談なのか本気なのか、今一つ判別が付かない。大して答える気が無いのか、ロットバルトはクライフを眺め、その件を打ち切った。

「何の用です？ 貴方がわざわざ私を探すとは珍しい」

「そんな事ねえだろ。いつも仲いいじゃん俺等」

冷めた視線を向けるロットバルトに構わず、肩にがっ腕を回し、クライフはそのまま声を落とす。

「お前どう思う？ 今回の件」

「……どう、とは？」

ロットバルトは特に表情も変えず問い返したが、クライフの問い掛けの根にあるのは、昨日のロットバルトとグランスレイとのやり取りだ。

「だからさ、剣士だよ。何か全体がはつきりしねえ。奥歯に物の挟まった感じだろ？」

「抽象的ですね」

「だから聞いてんじゃねえか」

クライフは周囲をさり気なく見回してから通りを歩き出した。陽は中天を過ぎていくが、今の季節はどことなく空気が肌寒い。通りの街路樹はすっかり茶や黄に染まり乾いて、後は散るのを待つだけだ。

兵舎の並ぶ通りを抜けて士官棟へと歩く間、兵達が二人が通り過ぎるに従って立ち止まり、敬礼を捧げる。クライフは手を上げて答えながら、改めて隣に視線を向けた。

「お前は何か知ってんじやねえかと思つてさ。副将に何か言つてたよなあ」

「おや、よく覚えてますね」

「おい……」

眉をしかめるクライフを一度確かめるように眺め、ロットバルトは視線を前方へ戻した。

「残念ながら私も、大した情報は持っていませんよ」

「ホントかよ」

疑うというよりは、意外そうな響きだ。はぐらかすつもりではなかったが、確実な情報は持っていないのは事実でもある。レオアリスに示したように、表立って探る事は出来ない状況下では、得られた情報は無かった。

シスファンとの面会も結局は、ロットバルトの推測をある程度補つただけに過ぎない。

やはり一番明確な情報を得られるのは、グランスレイが口を開く以外にないのだろう。

「……確かに、副将は我々に隠している事があるのでしようね。我々と言うよりは上將に。もちろん、全ての情報を開示する事が物事を優位に働かせるとは限らない。出すにしても時期はある」

真実を知る者達が隠しているのはレオアリスとバインドとの関わり、そしてバインドそのものについてだ。

あれほどの力を持つ剣士が、何故記録として留められていないのか。

全く情報を持たない存在など無い。意図的に殺されない限り。

情報を殺せるのは誰だ？

グランスレイに、シスファンに口を閉ざさせる存在は。

そして、そうまでして殺したい情報、その事実が何なのか。

バインドは現在、軍の、王国の敵だが、十七年前は。

（違はずだ。少なくとも単純にそこに分類できるものではないだろう）

隠し事をする場合は、身内に都合の悪い事が圧倒的だ。

『恐怖さ』

自嘲するような響きだった。

（やはり、バインドはかつて軍に所属していたと考えるべきだろうな）

その上で、レオアリスとの関わりがどう生じてくるのか、一番の問題はそこだ。

バインドがレオアリスと同じように、「暴走」を起した事があるのか。

（そうだとすると、少し不味い）

内務がシスファンに証言を求めたのがミストラでの状況だとすれば、臍

げに事の外郭が見えてくる気がする。

蓋をされた過去と、剣士に対する反応、レオアリスに対する殊更の批判。

レオアリスを補佐すべき立場にあるグランスレイの沈黙。

知らせないようにしているのは、何の為か。

数少ない断片を繋ぎ合わせて無理やり形作るとすれば。

ロットバルトは自分が取る道を、そこから想定してみる。

隠すのは、レオアリスがバインドと直接の繋がりがある場合。

もしくは。

（同じ事を引き起こす可能性がある場合だ）

「おい。一人で考えるなよ！ 暗えなあ！」

黙り込んだロットバルトの肩を思い切り小突いて、クライフはその顔を

覗き込んだが、思考を中断されて冷え切った視線に迎えられ、そのまま肩

を縮めた。

「すみません……」

「……私の意見は取り敢えず置いておきましょう。貴方は今回の事をどう

捉えているんです？」

クライフは一旦ロットバルトを眺めてから、視線を戻し、表情を引き締

めた。

「――外門を破つといて、何をするでもねえ。割に合わねえ行為だよな」

「成程、破城は貴方の専門分野でしたね」

「そう、だから奴の目的は元々狭エんだ」

立ち止まり、戦場にある時のような厳しい眼をロットバルトに向ける。

声は囁くように低い。

「目的は上将だろうな」

「――その発言は、上将の立場を悪くしかねない」

返す声は更に低く、向けられた氷のような視線にも、クライフは動じる事無く、にやりと笑った。

「俺はもしそうだって、変わんねえ」

ロットバルトはその眼を見据えていたが、ややあつて口元を歪めた。瞳に刷いた凍る色が薄れる。

「――そこに答えがありそうですね」

レオアリスの立場に。

グランズレイの態度、隠された情報は、ロットバルト達が想定している以上に、レオアリスを中心にある可能性が高い。

「けど、砦の崩しどころが見えねえんだよなあ」

クライフらしい表現にロットバルトも頷く。

「ただ崩れないだけならましですが、思わぬ所から決壊するのが怖い」  
想定外の所から崩れた場合、事態は必要以上に悪くなりかねない。ただ

でさえレオアリスは批判の多い不安定な位置にある。それは避けるべきだ。

(それも、少しくらい手を打つか)

「いい加減今度、副将にはつきり聞いてみようぜ。ごちゃごちゃすんのはめんどくせえ」

「直球ですねえ」

その言い草にロットバルトは苦笑を浮かべたが、実際この問題は外堀を埋めようとしても埋まり切らないのかも知れなかった。いつそ危険を無視してでも、直接門に手を掛けた方がいい結果を生むかもしれない。

「今日にでも俺から聞いてみる。あの人だって何か理由があつて黙ってるんだろ。だからって一人で考える事でもねえけどな」

「不本意ですが、同意しますよ」

「何で一言多いの? ……と、ヴィルトールじゃん」

師団士官棟の入口に着いたところで、通りの左手からヴィルトールが歩いてくるのが見えた。足を止めた二人の前まで来ると、ヴィルトールは軽

く右手を上げた。

「珍しく真剣な顔してるけど、女の子に振られたかい?」

誰が、とは言っていないものの、自分に真っ直ぐ向けられた顔にクライフは顔をしかめた。

「それは俺に言ってるのか?」

「私の訳がないでしょう」

「何で言い切る……」  
繊細な色硝子が嵌め込まれた扉を潜り、冷えた広間を通って明るい陽射しの満ちた回廊に抜ける。四角く中庭を囲んだ回廊の正面が、彼等の執務室になる。少し前に中将以上の執務室を一部屋にまとめたところ、業務の

効率が良くなった。

右手に見える中央の噴水が鳴らす涼やかな流水音が、静かな回廊内に彩

りを添えている。

「そーいや、お前はどこ行ってたんだ? 途中から顔が見えなくなっただよ」

「うーん。まあ面倒くさい用事って言うかねえ」

「めんどくさい用? 奥さんのお使いか?」

「何でそれが面倒なんだ? 人参一本買うのも、どんな手料理になるのかと考えると楽しいじゃないか」

「ああ、そう……」

閉口したようにクライフが顔を逸らすのを眺め、それからロットバルトの蒼い瞳に向かつて、ヴィルトールは穏やかな笑みを見せた。

「そういう楽しい事じゃあなくて、面倒で時間の無駄なだけの事だよ」

「訳わからねえな」  
クライフは眉をしかめたただだが、ロットバルトは心の裡で苦い息を吐いた。

(それも当然か)

シスファンが辺境から呼ばれた以上、あの時ミストラにあった第一大隊の者が召喚を受けない訳が無い。

ヴィルトールの口調も表情も穏やかそのものだ。明言しないながらも口

に出して見せるという事は、おそらく問題はないのだろうが、状況を問うべきかどうか、ロットバルトは思考を巡らすように瞳を細めた。

「そうだ、ロットバルト。内務でヴェルナー侯爵から言付かったんだ」

「——何の用です？」

注意深く見なければそれとは気付かないが、眉根に苛立ちを覗かせたロットバルトの顔を眺め、ヴィルトールは内心苦笑を浮かべた。ロットバルトが僅かなりともこうした表情を見せるのは、この名を聞いた時くらいだ。

「私などに用件の内容までは仰らないよ。けれど、午後にも一度屋敷に戻るようにとの仰せだ」

ロットバルトは一度ヴィルトールに眼を向け、すぐに浮かべた表情を掻き消すと、口元に笑みを刷いた。

「判りました。後程時間を見て出向きます」

「そうだね。ああ、それから上將は公に引つ張られて『アル・レイズ』に行かれたよ。戻りは遅いんじゃないかな」

「アル・レイズ？」

クライフが聞き馴れない響きに眉を上げる。

「どこの街だ？」

ヴィルトールは大きさに溜息をついた。

「お前はだから振られるんだよ」

「だから俺がいつ振られたってんだ？」

「最近城下の一層に出来た料理店ですよ。まあ、連れて行けば女性は喜ぶでしょうね」

「そういう心遣いがないから振られるんだ」

「いい加減にしろよ……」

クライフはそう言いながらも、今度使おうと口の中でそれを復唱し直している。

丁度その時、執務室の扉が開いた。顔を覗かせたフレイザーが取っ手を手を掛けたまま、扉の前で立ち話をしている男達を不審そうに見回す。

「貴方達、何をやってるの？窓から姿が見えたのに入って来ないと思った

ら、こんなところで井戸端会議？」

クライフは一度視線を天井に向けてから、フレイザーに向き直った。軽く咳払いして、口を開く。

「フレイザー。今夜アル・レイズに行かねえ？」

フレイザーは束の間クライフを眺め、柔らかに微笑んだ。

「また今度ね」

そのまま扉が閉ざされる。クライフは暫く黙った後、両脇を睨んだ。

「……使えねえじゃねーか」

「阿呆か」

「直球過ぎるんですよ。誘うにも時と場所というものがあるでしょう。」

第三者が居るところでなどと、第一に誠実さが感じられない」

「はあ。もう使えない情報は忘れるべきだよ」

クライフは二人を睨んだものの、文句を言う代わりに力なく肩を落とし、た。

「フレイザーって、好きなヤツいんのかなあ」

どちらかといえば自問自答の溜息に近かったが、ロットバルトとヴィルトールは項垂れたクライフの頭ごしに顔を見合わせた。ロットバルトが珍しく、優しいとさえ言える笑みを向ける。

「……仕方ありませんね。私でよければ相談に乗りますよ」

「何だ、その哀れみの籠った眼は」

「ただ、私はこれまで一度も女性に振られた事はないので、どこまで参考になるか判りませんが」

ヴィルトールもまた、クライフの肩に手を置いて頷いた。

「そうだな。クライフの為だ。及ばないだろうけど力になるよ。飲み明かすなら付き合うからね」

「——てめえら、喧嘩売ってんなら……」

ふと口をつぐみ、回廊の入り口を振り返る。

慌ただしい足音が硬い大理石の廊下に響き、すぐに一人の兵が回廊に姿を見せた。師団兵ではなく、正規軍の下士官服を纏っている事に、三人は顔を見合わせた。正規との連絡調整を行う事務官が遅れて駆けてくる。

正規兵と事務官は執務室の前に立つ三人の中将を見て、緊張した面持ちに安堵の色を浮かべ、走り寄った。

十

城下の街は常に賑やかな喧騒に満ちている。王都の住人達と各地から訪れた旅人や商人など、様々な者達が肩を擦り合わすように大通りを行き交っていた。

王都で一旗上げようとやってくる者達は後を絶たない。清濁併せ持つこの街で成功し、財を成した者は少なからずいたが、その成功の陰で陽の目を見ない者達も数え切れない程あった。

ここ上層区域であれば財産を失っても故郷に帰る程度で済み、まだ軽い失敗の内だ。自己認識や安全管理を怠ってはいけないと、その後の教訓にすればいい。しかし周縁部の下層地区では、金銭どころか生命を失う例も少なくはなかった。

アル・デイ・シウム、『美しき花卉』と呼ばれるこの都は、広げた花びらの一枚一枚に複雑な色合いの影を宿している。

レオアリスは様々な店が並ぶ賑やかな通りを歩きながら、自分がこの街を初めて歩いた事を思い出していた。

あの時の自分にとっては王都は途方もなく巨大で、曖昧な意志や期待など、容易く打ちひしぐ容赦のない場所に思えた。

そもそも剣士など、自分ですら話程度にしか知らないものが自分なのだと知って、戸惑いばかりが強かった事もある。

王の御前試合を勝ち抜く事で僅かな自信を得、師団に配属された事はただ嬉しかった。最初から全て順調に行っていた訳ではなかったが、気が付けば大将などという場所に居る。

(大将か)

いつの間に、こんな所まで来たのだろうか。

王城内ではそれに囚われる事無く在る事は不可能だが、ただこうして街を歩くと、身を覆っていたものは一歩ごとに剥がれ落ち、何も持たないあの頃の自分に戻る気がする。

しかしいつもは開放感を感じるそれも、今はどこか心細ささえ覚えた。

喧騒に紛れていた思いが再び心に浮き上がってきた時、前を歩いていた

アスタロトが足を止め、思考は中断された。ふと気が付けば、見た事も無い程の美しい少女を追って、辺り一帯の視線も止まっている。

(目立つヤツ……)

普段顔を見ていて、しかもアスタロトの言動を知っている為を意識する事は少ないが、アスタロトは非常に美しい顔立ちをしている。レオアリスの故郷の辺境部でさえ、アスタロトの噂は聞き及んでいた程だ。

曰く、傾国の美女と……。

(先代だ、絶対……。)

美女と言うにはまだ年が足りない。加えてアスタロトの実態を知ったら、彼等の内少なくとも二割は視線を戻すに違いない。

「ぼーっとすんな。可愛い女でもいたか？」

アスタロトは店の扉を押し開けようとしていた手を止め、レオアリスを振り返った。

「いないよなー、私以上のヤツは」

そう言うて非常に得意そうに顎をつんと上げてみせる。

それにはそれなりに同意も覚える。それ相応の年齢になれば、傾国も大袈裟な言い方ではなくなるだろう。……見た目は。

「それよりほら、結構最近お気に入りな店なんだー。何て言っても飯が美味い」

「……飯？」

何の話かと改めて目の前の建物を眺めれば、通りに面した白い壁に広い硝子窓がいくつも張られた、潇洒な雰囲気を持った店だ。『アル・レイズ』という名前が、緑銅で縁取られた白い雪花石膏の板に刻まれ、扉の上に掲げられている。

通りの右奥は行き止まりで、その先は高台になっているのか、低く作られた煉瓦塀の向うに、薄く柔らかい色をした雲と青い空が半分覗いていた。

「眺めもいいぞ」

そう言うてアスタロトは扉を押し開けた。確かに、眺めは良さそうだ。

広く間取りの取られた店内は右奥の壁一面が硝子張りになっていて、高台からの景色が見渡せる。外には露台が張られ、そこにも三つほど席があっ

た。昼食時にはまだ少し早い、店内には既に何組もの客がいて結構込み合っている。

店内に入ると入り口の傍にいた店員が歯切れの良い声をあげた。卓に着いて思い思いに食事をしてきた客達が、釣られるようにアスタロトの上に視線を向け、驚いたように眼を丸くする。

「まあ、アスタロト様だわ」

「この店によく見えるとは聞いてたけど……」

アスタロトの名前に店内にざわめきが広がる。この国の最高位の貴族である四大公の一人が、一般の民が通う店に来るということ自体、他の四大公では考えられない事だ。気さくなアスタロトは、城下でも非常に人氣が高い。

「あの隣の子は？」

「子って、あれ、あの服師団だぜ。しかも士官だ」

「士官？ あの歳で？」

彼等の興味は自然、横にいるレオアリスにも注がれたが、師団大将といえ一般にはほとんど顔は知られていない。

剣士、或いはその名を聞けば誰しもが膝を打つだろうが、注がれる視線の中にそれと気付いた者はいないようだった。

「軍と言え、エザムが襲撃されたという話だ」

微かな声だったが、レオアリスは素早く視線を投げた。中程の卓に座っている壮年の男だ。妻らしき女性が眉を寄せる。

「怖いわ……貴方、気を付けていたただかなくては……」

「私の販路は西方だから、それほど心配はない。だが、エザムの近辺は今通行が出来ないらしい」

「そんなに酷い状態なんですか、お父さん」

男と同席の青年が身を乗り出す。

「北方軍が封鎖しているから、状況は良く判っていないようだ。ただ、北の商人達は迂回させられて、日数も経費も余計にかかってしまうとぼやいてるよ」

「でも、アスタロト様がこちらにいらっしやるって事は、それ程問題はな

「いって事なんじゃないですか？」

「そうかもしれない。だが王城でも先日、北の外門で侵入者騒ぎがあっただろう。治安が悪化しているとまでは行かないのかもしれないが、情報をもっと欲しいところだ」

アスタロトは空いていた露台の席を注文すると、レオアリスの了解を得ず案内の後を付いてすたすと歩いていく。先ほどの男達の卓の傍を通りかかると、彼らは慌て口を閉ざした。

(城下は、まだこの程度の情報か……)

今回の件に関しても、城下の情報規制をしているとは聞いていたが、思った以上に閉ざされているようだ。レオアリスはさりげなく店内を見渡した。ほとんどの客の視線はアスタロトの姿を追っている。

アーシアに促されてレオアリスも露台に置かれた席まで行くと、既に席に着いているアスタロトの前に座った。

アスタロトは早速、店員に何やら注文を始めている。手元の品書きを何も見ていないせに次から次へと出てくる単語にただ感心して、レオアリスはやる事もなく頬杖を付いた。

露台の席と店内を仕切る硝子戸に目を向けると、注がれていた視線が一斉に散る。

「——」

多くはアスタロトを見ていたが、興味の対象はそれだけではないのだろう。やはり彼等も、今王城内とエザムで起こっている事が気になっているのだ。

乳白色の優美な欄干の向こうに目を向ければ、高台に張り出すようなそこから城下の街が望める。すぐ下に見えるのは商人や職人達の多く住む地区だ。通りに沿って店の日除け布が色とりどりに広がっている。

普段と何も変わらない、王都の町並み。今回は厳しく情報規制が敷かれているが、伝わったとしても、生活に影響がなければ噂話程度に囁かれるくらいで、日々の暮らしは変わる事無く流れていく。

この場所から北の方角は望めない。  
街道上のエザム、そして、北の果てにある故郷。

(十七年前か)

重い息を吐いて正面に顔を戻し、——思わずがたりと椅子を引いた。  
「なっ……」

息を呑む光景というのは、実際こういう事をいうのではないか。

黒檀を円に削り上げた上品な卓の、艶やかな表面はすっかり覆われて、見えない。

卓を覆い隠しているのは、様々な料理の盛られた幾つもの皿だ。冷菜、温菜、汁物、炒め物に揚げ物、焼き物、肉料理や魚料理。全部で十人前くらいは軽くありそうだ。

「……何だ、これ……」

呆然と呟いたレオアリスを余所に、アスタロトは嬉しそうに瞳を輝かせた。

「食うか？ お前の分も頼むぞ」

レオアリスは思わずもう一度卓の上を見渡した。

「……え、これ俺の分ねエの？！」

弾かれるように顔を上げてアスタロトを眺めたが、はっと気が付いて慌てて首を振る。

「……って、そうじゃねえだろ！」

机を叩きたたくても叩く余地が無い。レオアリスは仕方なくアスタロトを睨むだけに止めた。アスタロトが愛らしく首を傾げる。

「何って、ごはんデシヨ」

向けられた甘やかな笑みに、つい緩みそうになる口元を無理矢理引き結ぶ。

「——そうじゃなくてよお……」

レオアリスは肺の空気を全て吐き出す程の溜息をついた。

店内の客達は、今度は別の意味で硝子戸の奥の卓に視線を集中させている。だがそれも、たった三人でこれだけの量を注文すれば当然だろう。アーシアは食事を摂らないレオアリスの分は含まれていないというのだから、正確にはアスタロト一人で食べるのだが、多分、本意にも、他の客達はレオアリスがこの大半を食べると思っていに違いない。

「相談料」

アスタロトがにこり、と笑う。頬を赤くして熱心に見つめてくる窓越しの客に、ひらひらと手を振ってみせた。

「はあ？」

「だからあー、話を聞いてやるから奢れ」

「……何かずいぶん高くねえか？」

「安い方だ」

はあ、と再び溜息をついて背凭れに寄り掛かり、レオアリスは諦めた顔になって、嬉々として食べ始めたアスタロトを眺めた。

「ああ、アスタロト様、こぼさないで。それから一皿だけ召し上がるのではなくて、色んなお皿をそれぞれまんべんなく召し上がるのが礼儀ですよ」

「はあい」

三度溜息が洩れそうになる口元を咄嗟に押さえた。こうなったらもう溜息をつくのももつたいない。口元に片手を当てたまま、目の前にあった料理が次々とアスタロトの口に消えていくのを、レオアリスは今更ながらに感心して眺めた。

元来アスタロトは良く食べる。しかし、あの胃は絶対どこか、異次元に繋がっているに違いない。噛み砕かれたものが降ってきたらもの凄く迷惑だよなあ……、と、レオアリスは非常にどうでもいい事を想像した。

「んで？ 十七年前って何？」

「え……？ ——あ、ああ」

ふいに問われて、レオアリスは二、三度瞬きをし、椅子に預けていた身体を起こした。思わず本来の目的を忘れていた。

その原因を作ったのが自分であるにも関わらず、アスタロトは呆れたように美しい顎を持ち上げると、既に半分以上片付けた料理の皿を脇に寄せ、一先ずアースアが淹れたお茶に手を伸ばした。

「今の件に関係あるのか？」

ざわざわと店内に満ちる賑やかな空気は、まるで今の状況にはそぐわない。だが、逆にこの方がいいのかもしれない。少しぐらい現実と離れた場所から、第三者的な視点を持って眺める事も必要だろう。アスタロト

がそこまで考えてこの場所を選んだのかは分からない。

（意外性あるからな、こいつ）

しかし、では何を、と問われると、何が一番の問題なのか、曖昧なままな事に気付く。躊躇うように卓の上に視線を落としたレオアリスに、アスタロトは首を傾けた。

「何を調べて、どの部分で答えが出てないわけ？」

「……答え、か……。多分、答えは全く出てないんだ」

改めて考えてみれば、バインドが現れてから既に五日近くが経過しようとしているのに、レオアリスの手元にある情報はそれから殆ど変わっていないままだ。逆に、捜せば捜すほど、周囲の扉が閉ざされていくような感覚がある。

「——判ってるのは十七年前に鍵があるって事と、バインドの名前だけだ。だから、そこから調べようとした」

「師団に関係あるのか？」

「判らない。おそらく、だ」

深紅の瞳をじつとレオアリスに注いで、アスタロトは暫らく両手の指を顎の下で組んだまま黙っていたが、一度ゆっくりと瞼を閉じた。

開かれた深紅の瞳に、心の中を見通すような光が浮かぶ。

「なあ。まだ私は、何でお前がそんなこと調べてるのか、聞いてない」

レオアリスは再び躊躇うようにアスタロトの顔を見つめた。

『お前の一族はどうなった』

あれ以来、常に頭の中に留まり続けて離れない、その言葉。

それが何を指しているのか判らない事が、一番の問題だ。

『仇の元に仕えるか』

嘲笑う響き。

レオアリスは静かに息を吸い込み、それから肺から押し出される空気の勢いを借りるように、言葉を吐き出した。

「……奴が王城に侵入した晩に、俺に告げた事だ」

アスタロトが細い弓なりの眉を寄せる。

「俺の、生まれた頃と、一族について、調べると」

「一族？お前の一族か」

意外そうに声を上げたアスタロトに頷く。

レオアリス自身、自分の一族について、これまであまり多くを考えた事は無い。失われたのか、——もしかしたらどこかにいるのか。

故郷の森にある、あの廃墟。そこがそうだという確証など無い。そこではないかと思いつながら、否定する気持ちはずっとどこかにあった。

それは淡い希望だ。だからこそ、敢えて考えようとしなかったのかもしれない。

黙り込んだレオアリスを見て、アスタロトは首を傾げた。

「自分で調べてたんだろ。さっきもさ。何かあったのか」

「無い。不自然なくらい、何も——」

中途半端に、レオアリスは口を閉ざした。

(不自然だ)

今までは漠然と、記録が無いのなら、そういうものなのかと半ば納得しようとしながら、ずっと胸の辺りに引掛かっていたのはそれだ。

スランザールの言ったとおり、王立文書宮にも、当時を記した文書は無かった。バインドの名すら出てこない。名が違っているのかと剣士で引けば、多くは三千年前まで遡ってしまう。

レオアリスは右手を二、三度握り込み、開いた掌に視線を落とした。

バインドの存在は確かだ。

剣を打ち込んだ感触は、今でも明確に思い出せる。

スランザールは確実に何かを知っている。総将アヴァロン、正規軍の何人かの将校、そしておそらく、グランスレイも。

存在は事実、何かしら、それが何か判らないものの、知っていないながら隠している者があるのも事実なら、文書に残っていないからと言って初めから無かったと考えるのは、その方が無理がある。

(——何だ……)

何を隠している？ 隠すのは何故だ？

自分とバインドとの間に、一体何があるのか。

それが何であれ——

誰もが口を閉ざす事によって、言外に告げているのではないか。あの男の言葉が、正しいと。そして。

『仇』

心臓が早鐘を打つ。

焦燥がじりじりと胃の中で焦げる。

ロットバルトはシスファンから何か情報を得られただろうか。

シスファンはバインドを知っているのか。

「——バインドか」

考え込むようなアスタロトの呟きに、レオアリスは顔を跳ね上げた。

「何か知ってるのか!？」

レオアリスの勢いに驚いて、アスタロトは少し瞳を見開いた。柔らかな頬の線が引き締まる。

「いや。だが調べよう。先日のじじいどもは確かに変だったしな」

アスタロトはたおやかな手に細い顎を乗せたまま、思い起すように天井を見上げた。

そう、確かに初めてバインドの名が出た時、議場内に一瞬戦慄にも似た空気が走った。それは何かに抑えられたかのようにすぐ消えたが、表情に微妙な変化を残した者、全く反応を示さなかった者、二通りだ。

「判ったら、教えてやる。……ま、あまり考え込むなよ。バインドとやらを倒す事が先決だ。それより、お前——バインドが言った事は、他にはもうないな？」

アスタロトの深紅の瞳がじつとレオアリスに注がれ、レオアリスはそれを受け止めるべきか逸らすべきか、迷うように見返した。

「……いや」

歯切れの悪いレオアリスの瞳を、アスタロトがじつと覗き込む。

「本当か？」

「……お前には言うよ。判ったら」

「……ふん。ちゃんと話せよ」

頷いた時店の扉が開き、東の間、通りの喧騒が店内の空気と混ざり合っ

た。扉の傍から店内に騒めきが広がる。入ってきたのは背の高い金の髪の青年だ。中性的に整った顔を店内に向け、すぐその視線を一点に止めた。客席、特に女性客が陶然と見惚れる中、青年は店員の案内を断って露台の席へ足を向けた。

「げげ」

少し慌てたようなアスタロトの表情に気付いて、レオアリスが振り返る。「ロットバルト。良くここが判ったな。それで」

立ち上がるようにしたレオアリスを片手を上げてやんわりと制し、ロットバルトはアスタロトに一礼すると、レオアリスの耳元に顔を寄せた。

「――バインドです、上将」

低い声に乗せられた名前に、レオアリスの瞳が陰しさを帯びる。それまでの煩悶の色も、影を潜めた。

「私にも聞かせろ」

アスタロトの言葉に頷き、ロットバルトは二人に姿勢を向け直した。

「つい先刻、アス・ウイアンに現われたとの報告がありました。現在、街道に配備されていた北方二軍の中隊が向っておりますが、間もなくアス・ウイアンに到達するものと思われまます」

アス・ウイアン。先日のエザムよりも更に北の街だ。レオアリスは席を立ち、アスタロトに視線を投げた。

「アスタロト。手え出すけど、いいな」

正規軍の管轄に、という事だ。

「いいよ」

あつさりと同いて、アスタロトはレオアリスを促すように手を振ってみせる。

「――カイ」

レオアリスが小声で呼ぶと、どこからか微かな鳥の声が答えた。常にレオアリスの傍に従う使い魔だ。レオアリスの指示を瞬時に伝える事ができる。

「グランズレイに伝える。市街地ならヴィルトールだな。俺は直接現地に向う」

低く告げ、今度はロットバルトに視線を向ける。

「ハヤテは？」

「上空に」

頷いて見上げると、上空で銀の鱗が光を弾いた。一旦動きかけてぴたりと足を止め、レオアリスは再びロットバルトを振り返った。

「悪い、立て替えといってくれ。それから、戻ったら話を」

それだけ告げて一度高く指笛を鳴らし、露台の低い欄に手を掛け、レオアリスはそのまま飛び降りた。

店内で数名が思わず息を呑んだ。

直後、上空から銀色の疾風が駆け抜け、その背にレオアリスを掬い上げて再び上空へと上昇する。

「アス・ウイアンだ。お前なら半刻で飛べるな？」

飛竜の青い瞳を覗き込むと、ハヤテは聞くまでも無いと言わんばかりに高らかに鳴き、一度大きく風を煽った。

瞬く間に銀竜の姿が蒼天に消えるのを見送って、アスタロトは肘を突いて顎を支えたまま、どこか気まずそうにロットバルトから顔を背ける。

「うーん。律儀なヤツだ。別の機会でもいいのに」

「……立て替え、ですか」

いちいち確認するように繰り返す声が怖い。ロットバルトが冷めた蒼い瞳を、チラリと卓に流す。卓の上には既にすっかり空になった皿が、いくつも重ねてあった。

「なるほど？」

「あはは。……一応言っとくけど、レオアリスにも勧めたぞ」

食べてないけど、という言葉は口の中に飲み込み、取り繕うようにひらひらと手を振るアスタロトの横で、アーシアが笑いを含んだ溜息を洩らす。

「公」

整った面に柔らかな笑みを刻み、ロットバルトはアスタロトに向き直った。

「な、何だ」

アスタロトは少し身構えるようにロットバルトを見、それから傍らの

アーシアの耳元でこっそりと囁いた。

「やっぱ食い過ぎ？ でも腹八分目だよな」

「知りませんよ」

「締め菓子食ってないし」

「まだ召し上がるおつもりだったんですか？」

ひそひそと交わされる言葉が漏れ聞こえ、ロットバルトは浮かべた笑みを苦笑に変えたが、すぐに蒼い瞳に一種の冷厳とさえ言える色を刷いた。

「私が直接参ったのは、単に伝役だけの為ではございません」

改めて姿勢を正し、アスタロトに視線を向ける。

「分を超えた発言と承知の上で申し上げます」

支払いに関して苦言を呈されるかと首を竦めていたアスタロトは、肩を降ろしてほっと息を吐いた。ロットバルトが笑みを消す。

「――アス・ウィアンに向った北方二軍を抑えて戴きたい。無駄な犠牲は避けるべきかと」

北方二軍ではバインドを止められない、と明確に告げている。侮辱とも取られかねない、そんな発言だ。

「レオアリスの邪魔をするなって？」

「そうお取り戴いて結構です」

ロットバルトの口元に浮かんだ穏やかとさえ言える笑みに、アスタロトも笑う。

「言うなあ。ま、お前のとこの総将からも言われてる事だ。いいさ、そう指示しよう」

ロットバルトは胸に左腕をあて敬礼を施すと、踵を返して扉に向った。

「うわ、フツーに払ってるっ怖っ」

「……アスタロト様は、あの方は苦手なんですわね」

アーシアが可笑しそうに笑みを浮かべると、アスタロトは白い頬に少し憤慨した色を刷いた。

「苦手なわけじゃないぞ。けどさあ、一言ったら十返してくるし、何言っただって表情も変えやがらないし、あいつに比べたらグランスレイの方が数十倍可愛いよな？」

「さ、さあ……」

立場上も含めて頷くのは難しい。ただ、ふい、と横を向くアスタロトを見て、アーシアは更に可笑しそうにくすぐすと笑い声を洩らした。

「どうやらアスタロト様に忠告を聞いて戴くには、ああした所作を身に付けた方が良さそうですね」

途端にアスタロトはひどく動揺した顔で振り返った。

「止めるよ、可愛くない。お前は一番可愛いんだから、このままでいいの！」

アーシアの頭をぎゅうぎゅうと抱き込み、髪に頬をすり寄せる。アーシアは収めかけていた笑いを再び上らせた。

「……冗談ですよ。でも」

(やっぱり少し、羨ましいいな)

アーシアとしては、ああしてレオアリスを補佐できているロットバルトは羨ましささえ覚える。自分の立場では、アスタロトを政治的に補佐しようと思っても出来ないからだ。

「でも何だよ」

「いえ」

アーシアはいつも通りの柔らかい口調で首を振った。

力や地位や財力など、伴えば伴う程逆に孤独を産むものだ。そんな事を言えばアスタロトは怒るのだろうが、アーシアは時折、アスタロトの中にそれを見る。アスタロトの奔放な態度は、そこに起因していると思っ

三年前にレオアリスと出会った事で、アスタロトは少し立つ位置を変えたように思う。結局は離れられなくても、そこから見える景色は前と違うだろう。楽しそうな表情を浮かべるアスタロトを見つけた度、アーシアは穏やかな安堵を覚えた。

アスタロトはまだアーシアの頭を抱え込んだまま、店の扉と北の空を見比べた。

「ふん。ま、あれは有能で地位がある。今みたいにレオアリスがいない所を選んで、自分一人の発言に留めるところなんて大したもんさ。いずれい

い補佐役にも後ろ盾にもなるだろう」

「……アスタロト様がなつて差し上げてはいけませんか」

後ろ盾に、という意味だ。アスタロトが明確にその立場を表明すれば、少なくとも軍内部で批判が上がる事はなくなるだろう。

だがアスタロトはあっさり首を振った。

「やだよ。私は友人だもん。ヤツに感謝なんかされたくない」

そう言うと、アスタロトもまた席を立った。

「さて、私達も行こう。バインドとやらを拜んでやる」

ざわざわと喧騒に溢れる街を抜ける。自分に注がれる視線を少しも気にする様子もなく、ロットバルトは人々の行き交う通りを歩く。

アス・ウィアンに向った北方軍は、アスタロトの命で止まるだろうか？

北方二軍は勇猛で知られ、率いているのは輪をかけて気性の荒い中將カシムだ。

ロットバルトは口元に薄く笑みを刷く。

止まらなくても、何ら問題はない。

要はアスタロトの命があったという事実と、レオアリス以外にバインドを止め得る者はいないのだと、その二つが明確になりさえすればいいのだ。くだらない批判をいつまでもさせておく必要はない。

(間に合うか?)

風を切り裂いて走る飛竜の背で、レオアリスは北の地を見透かすように視線を凝らした。

バインドが現れてから、どれ程経つのか。

アス・ウィアン——そこに、バインドが居る。

全ての疑問の答えが、そこにあるはずだ。

自分の剣を止めた、剣士。

どくん、と身の裡の剣が鳴動した。

レオアリスは自分でも気付かないまま、口元に笑みを浮かべた。